
異世界の聖機師物語 another/story

syon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の聖機師物語 another / story

【Nコード】

N5786J

【作者名】

syon

【あらすじ】

争いが絶たない「ジェミナー」と呼ばれる異世界に召還された17歳の少年、如月トウヤ。トウヤはジェミナーで兵器「聖機人」に乘せられ、異世界の紛争に巻き込まれいく。

用語設定一覧（前書き）

ほとんど走り書きです。

今後新しいものが出た場合もここに追加していきます。

用語設定一覧

用語設定

「ジェミナー」〃 この作品の世界名

この世界には「エナ」と呼ばれる海がある。

「エナの海」とは目に見えるモノではなく、海拔500m前後までに層を成している。

この世界の文明は、全てが「亜法」を使った動力によって支えられている。

そして亜法のエネルギー源は「エナ」である。

そのため「エナの海」から少しでも離れると亜法の使用が出来なくなる。

そのため「エナの海」のある海拔500m以下に人々の生活圏が集中していること。

「喫水外」

「エナの海」以外の場所の総称。

喫水外にはエナ〃亜法が存在しないので亜法動力の聖機人および亜法を使用したモノは使用ができない。

「亜法動力炉（機） or 亜法結界炉」

エナ〃亜法を使用した動力機。

高出力の物は主に聖機人や戦艦などに搭載されている。

低出力の物は主に移動用のエアバイクや運搬機などに使用されており、このタイプの物は聖機師でなくても使用可能。

さらには小型の動力炉を使用した銃器なども存在する。こちら

聖機師でなくても使用が可能。

「聖機人」

ジェミナーには多くの国があり、互いに争いが絶えなかった。当然、兵器にも亜法技術が使われていてその主戦力が聖機人である。

聖機人の元になったのは創世時代の遺跡から発掘されたモノ。

聖機人はエナの海の中ではそのチカラは絶対的だが構造上大きな欠点がある。

それは搭載されている高出力亜法動力炉（亜法結界炉）が稼動すると特殊な振動波（亜法波）が出す事だった。

人間はこの特殊な振動波を受けると亜法酔いを起こしてしまう。

（イメージは船酔いw）

聖機人に乗れるのはこの振動波に高い耐性のある者、一般的に「聖機師」とよばれる者だけ。

聖機師としての能力が高いと尻尾付きになる。

「聖機神」

聖機人の元になった古代文明の遺産。

現在は稼動させられる聖機師の存在は確認されていない。

「機工人」

ワウが研究している亜法をエネルギー源とせず機械的な機構で動かされる機動兵器や工作機器。

亜法動力炉に頼らない物は、当然エナの喫水外でも活動可能。但し、現在は亜法動力炉を使用したものより出力、稼働時間が劣っている。

「亜法通信機」

亜法を動力に使用した。この世界での連絡手段の一つ。

通信相手とのホログラムによる会話が可能。聖機人にも亜法通信機が標準で装備されている。

通信機としての完成度は非常に高く、録音 or 保存も可能になっている。

「聖機師」

この世界において聖機人は絶対兵器。

ゆえに能力の高い聖機師を生み出すため、国によって聖機師の結婚は管理されている。

それに加え現在は女性聖機師の比率が極端に高いこともあって男性聖機師がとても貴重。婚姻も恋愛すら国に管理されているのが現状。

女性聖機師の場合は男性聖機師と子供さえ作れば、男性聖機師以外との自由な婚姻や恋愛もできる。

「聖衛士」

回復系の亜法を使い、肉体や聖機人の修復などを行える聖機師。ただし回復を受ける側もまた洗礼を受けていることが条件である。

「聖機工」

主に聖機人などの整備・開発を行える技術者。

「動甲冑」

聖機人の練習に使われる人型兵器。ダメージを受けると受けた箇所の色が変わり、ダメージ量に応じて動きが制限される。

動力炉はなく、特定のフィールド上か、有線での動力供給が必要。

「異世界人」

地球をはじめ、別世界より召喚された人達のこと。

例外無く亜法動力炉の振動波に対して高い耐性を示すため、聖機師としての地位も高く、また強い発言権も有り、地球の色々な文化や風習、個人的な趣味を広めている。

なお、召喚に関しては、星の配列と関係するため自由に行うことは出来ない。

現在では各地に存在してた召喚の遺跡はほとんどが破壊されている。戦時中に敵国の戦力を上げさせないために破壊された。

「属性付加クリスタル」

聖機人を聖機師固有のものとは異なる姿に変化させるアイテムで、変化能力以外の機能を備えたクリスタルも存在する。

「圧縮弾」

木や岩、鉄骨などに亜法でエナを注入して作る球のこと。

銃の弾丸として用いられる。また、結界工房で開発された聖機人を喫水外で活動させるための装置のエネルギー源にもなる。

「聖地&聖地学院」

教会の管理する女神との契約・洗礼の地。

聖地にある聖機師のための学院。聖機師候補以外には身分の高い者以外はめったに入学は許可されない。

花嫁修業の場という側面があるため、通常の学習以外に 華道や茶道、舞等の授業もある。 ↑恐らく異世界人の影響

「教会」

「ジェミナー」で最も権力のある機関。

各国の勢力均衡を保つため、聖機人などが教会によって厳しく制限・管理されている。

そのため各国は教会に定められた数の聖機人を所有できなくなっている。

なにかと謎の多い組織。

「女神」

教会の信仰の対象。姿どころか名前すらわからない。

聖地の門は女神の姿を模しているといわれている。

門の形状からすると、人型で光輪が羽衣を背負っている ように見える。

ブローグ「創世記」(前書き)

設定は、原作どおりだが、個人的な主観で進めますんでそのあたりはご注意を

あとオリ主ですが、他のキャラなどは原作から使つつもりです。

あまり文才はないと自分でもわかっているので、できる限り伝わるように書きますんで

読んでもらえるとありがたいです。

プロローグ「創世記」

旧西暦：A C 5 6 7 年 / 1 2 月 0 6 日

この日127年の永きに渡る世界戦争が終わりを迎えた

聖機人と呼ばれる、人型兵器

それを使つた国家間の武力における闘争の終焉

殺人、そんな生温いモノではない

殺戮、虐殺こんな言葉が似合う戦場

自らの正義を疑わず、敵を殺すためだけに戦う

人の歴史は血で紡がれる

そんな戦場に、突然” あれ ” が降り立った

そうして始まる、破壊

人であろうと国でさえも

すべてを蹂躪する

そんな、暴虐を繰り返す悪魔を倒さんと

世界は手を取り合った。

永きに渡る、闘争

そうして、世界は勝利を手にした

だが世界には、もう人は残っていなかった

これが、終焉

一つの終わり、そしてはじまり。

第十四章「終焉」>

<創世記、

プロローグ「創世記」(後書き)

とりあえずのプロローグ、本編的なのは次からです。

原作知らなくてもわかるように書くつもりですんでよろしくです。

第一話（前書き）

原作のまま書こうかと思いましたが、少し変更
オリ主とヒロインが出会う前振りになってます。

駄文ですが、伝わる事を祈ります。

第一話

2047年6月18日

シトレイユ皇国「国立図書館

「ああっっ疲れたっっ」机に突つ伏す

机には古い本が山積みになっている

そんなぼやきを漏らしているのは、15歳くらいの女の子

背にまで伸びた、癖の無い金の髪

顔もかなりの美人だろう、けど

その言動がすでにぶち壊していた。

「創世記のレポートとか無理だよ」

そう彼女はいま人生でも、最大の壁。そう言っても過言ではない、ギド先生のレポート

この壁は厚く高い、ギドは学院の中でも嫌われてる変態もとい変人である。

今回のレポートも、完全に嫌がらせだろう

なんせ、全108章もある「創世記」についてである。

ギドいわく「創世記に記されている、戦争での国家間での出来事および終結後今現在までにどうなったか、それを纏めてこい」である。

しかも「ああそれと他人の意見が混じったモノは却下、自分で書く事。君の文才に期待している」だ。

読むだけでも大変だ。実は「創世記」の原本は一般公開されていない、

なので翻訳書（一般公開）を探す所から始めなければならない。

めんどくさいそんな言葉しか出ない。

そんなわけで、もう一週間図書館に通い詰めである。うら若き乙女にこの仕打ち

仕事帰りの親父のような言動も仕方ないかもしれない。

ピンポンパンポン

『本日の閉館時間のお知らせです、またのご利用御待ちしています』

閉館案内のアナウンスが流れてくる。

もうそんな時間かと腕時計を見ると19:00前

そろそろ帰ろうと、机の本を返却窓口へ

「さてと、今日は何にしようかな」

図書館から出て、エアバイクにまたがると今日の夕飯について考え始めた「きのうは、魚だったから今日は肉だね」

買い物しなきゃと商店街の方に向かった。

side ????

「ここは？」

ベッドの上で目を開けた。

そこは簡素な部屋、窓は無くベッドしか無い

「牢屋？」そんな疑問が出てくる

すると突然『目が覚めたか』

そんな機械音声が部屋に聞こえる

「ここはどこだ？」

無言、こちらの声が聞こえてないのか

もう一度声を出そうとした所に『すぐに迎えに行く、おとなしくしている』

とりあえずおとなしくしておく、というよりもする事が無い

ほんとにここどこだろう？部屋を見渡すが何も無い

溜息が漏れる、昨日はたしかあれ？

「仕事から帰って、自室で寝たはず」記憶が曖昧でも

名前は如月トウヤ、年は17だ

趣味は、釣り/特技は、昔から習っている剣術&体術

仕事は、GP2級刑事兼雑務。

みんな心配してるかな、そう不安になるが

皆の顔を思い浮かべると「いや、心配しそうにないなあの人達」

しかし、困ったな連絡用の衛星通信機（時計型）部屋に置いてきたままだし

「ここ通信機とかあるのかな」できれば瀬戸様には連絡をしないと。

実は、トウヤの保護者は瀬戸になっている。

あまり知られてはいないがトウヤには、親という者が存在しない

数千年前に失われた、皇家の樹の種（第二世代）

それを樹雷の皇族以外が使えるよう、種を元に造られたのである。

「プロジェクトSEED」は種を元に人体を構成させる計画

その調査をしていた瀬戸が、研究所を発見

計画唯一の成功体、その身に皇家の樹を宿すトウヤ

そんな俺を発見保護したのである。

本来皇家の樹のマスターは皇位継承権を持つが

トウヤはそれを破棄、如月トウヤという名前を瀬戸様からもらい
そんな親代わりである、瀬戸の役に立とうとGPで働いている。

と自分の素性、ある程度の知識はある。

未開惑星とかだったらどうしよう、一抹の不安を拭いきれない状況

「はあゝ」まいったなこれは溜息が漏れる

「んっ？」なんだ？壁に向こうか

鉄が擦れるような音に足音が、1ゝ2ゝ3人

壁が横にスライドする

そこから仮面を被った人？が現れた「立て」

すこしムカツときたが、何ぶん情報がない

ここは素直に従おうと大して抵抗もしなかった

「こっちだついてこい」金髪の仮面が先を歩く

その後ろを、俺と両側から剣を携えた仮面に挟まれながら歩いて

行く

こいつら、あまり練度高くないな本当に兵士か？
鷲羽さんに生体強化してもらったトウヤにとっては
この三人の動きは、あまりにお粗末だった。

まあここは少し様子見だな
歩きながら周りを見渡すが、何も無い
無機質な石造りの廊下、窓も無い電飾の光のみ

「なあ、ここは何かの研究所か？なにかか？」
少しでも情報を得ようと話しかけてみるが

「だまってついてこい」問答無用ってやつか

あきらめてついて行くと
直線廊下の突き当たりに、重厚な鉄扉

ここだと金髪が扉を押し開ける。

「さあ、なかに入れ」背を押されなかに連れ込まれる。

広いな、かしなんだろう
壁や床の所々に何かを叩きつけたようなあと
それに、「あれはなんだ？」

トウヤでさえも見た事無いような、巨大な卵？繭？

それが、広間の真ん中に存在していた

これが、トウヤの初めての出会いだった。

side
out

第一話（後書き）

話の内容的には無理が無いようにしてるつもりですが、ご意見やご感想などくれると

今後の参考にしますのでありがたいです。

更新頻度は、週一程度になると思いますんで気長に待ってください。

第二話（前書き）

予定よりもはやくできたので投稿します。

誤字脱字、多々あると思いますが気にしないでください。
発見次第、修正します。

第二話

初めて、聖機人に出会ってはや1ヶ月がたとうとしていた

この1ヶ月の間は、聖機人の操縦法を教えられていた

最初は何をされるのか、心配だったがこの聖機人とかいうのは

「面白い！」自然と顔に笑みが浮かぶ

それにトウヤの持つ皇家の樹^{そつが}「蒼火がスゴく喜んでいた。
相性？が いいのかな

第二世代の樹である蒼火には人格というモノがあり、会話や感情
表現などでもできる

トウヤと蒼火は一心同体、トウヤ^{そつが}「蒼火／蒼火」トウヤてな感じ
である。

鷺羽さんにも、切り離すのは無理と匙を投げられたし

宇宙一の天才（自称）が無理となれば、それは誰にも不可能とい
う事である。

ちなみにその時、言われたことが「がんばれ！」の一言

それはもう、いい笑顔で言われましたよ。

「いいかいトウヤ、皇家の樹には人格がある。しっかり話し合えば
大丈夫さ」

それからは、蒼火との意思疎通のためコミュニケーションに励ん

だ。

それはもう大変だった、第二世代でも惑星一つ軽く破壊できる蒼火最初の課題は、そのチカラを抑える事だった。

樹のマスターになると、樹からの加護もといチカラの供給があるそれをしっかりコントロールしないと、それこそ惑星が消える。

幸い、蒼火って意外というかしっかりしたヤツなので苦労は無かった。

いまでは、大事な相棒でもあり相談役でもある。

この聖機人とかいうのは、乗る操縦者によって色や形状が変わらしい。

ちなみにトウヤは、白いボディに青い炎のトライバル

多分、俺一人なら真っ白、そこに蒼火がいるからだろう

蒼火によれば、光鷹翼の使用もできるらしい、試してないけど。

そしてなぜか、尻尾があるのだ。

正直デフォルトか？とか思ったが後々聞いてみると

ある程度の力がないとでないそうで、ここに俺以外は金髪1人だけ

なにも遊んでいる訳ではない、こうして情報収集をしているんだ。

なにせ、周りは仮面しか居ないし口が堅い。

そして1ヶ月で分かった事は、俺の知らない未開惑星である事。

名前は「ジェミナー」っていうらしい、そしてここからが重要である。

この世界には「エナ」と呼ばれる海がある。

「エナの海」とは目に見えるモノではなく、海拔500m前後までに層を成している。

この世界の文明は、全てが「亜法」を使った動力によって支えられている。

そして亜法のエネルギー源は「エナ」である。

そのため「エナの海」から少しでも離れると亜法の使用が出来なくなる。

そのため「エナの海」のある海拔500m以下に人々の生活圏が集中していること。

「聖機人」ジェミナーには多くの国があり、互いに争いが絶えなかった。

当然、兵器にも亜法技術が使われていてその主戦力が聖機人である。

聖機人の元になったのは創世時代の遺跡から発掘されたモノ。

聖機人はエナの海の中ではそのチカラは絶対的だが構造上大きな欠点があった。

それは搭載されている高出力亜法動力炉（亜法結界炉）が稼動すると

特殊な振動波（亜法波）が出す事だった。

人間はこの特殊な振動波を受けると亜法酔いを起こしてしまう。

聖機人に乗れるのはこの振動波に高い耐性のある者、一般的に「聖機師」とよばれる者だけ。

なかなか苦勞したが、ある程度の情報は集まった。

ただ帰る方法は見つからなかった。

帰る方法は見つからなかったが、1つ面白い事がわかった。

俺が見つかった場所についてだ、この世界では異世界人は過去に何度も来ているそうで

その場所も、召還の遺跡と呼ばれる場所だったこともあって、ここに連れてきたらしい。

なんでも異世界人は例外無く、巫法に対する高い耐久力があり。優れた聖機師である事が連れてきた理由だそうだ。

この情報から、来れるのなら帰れるだろうそう結論付けた。

ようやく訓練が終わり、割り当てられた部屋にもどった。

< なあ蒼火、これからどうしよつか？ >

< トウヤのやりたいようにしていいよ >

なにが面白いのか、笑いながら言う蒼火

< やりたいようにね > 悩むなこれはどうしよ。

まあ考えすぎても仕方ないし、寝よ。

< おやすみ。蒼火 >

< うん。おやすみなさいトウヤ >

考えるのは明日でもいいだろう、そう考えると自然とまぶたがおもくなった。

第二話（後書き）

よんでくれた人、どうもありがとうございます。

駄文ですけど、次回を楽しみにしてる人がいると信じつつ、頑張ります。

ではまたw

第三話（前書き）

ヒマなんで早めに更新。

第三話

エアバイクから降り、家の方に歩いて行く。

「ただいま」

両手に大きな袋を持って中に入る。

「おかえり、エリア」

「お母さんこれ、今日の分」

「そうそう、ラシヤラちゃんから明日の朝迎えをよこすって」

「えっラシヤラ様から？　ってお母さん、ちゃんはダメだよ」

私の雇い主な訳だしって、言っても無駄だろうと半ばあきらめているが

ラシヤラ様はこのシトレイユ皇国の皇女で、今は私の雇い主でもある
ある

今はラシヤラ様の侍女として働いている。

聖機師でもあるため、聖地学院を卒業したらそのままラシヤラ様の元で働く事になっている。

1週間ほど前から、病気の母のために実家に帰省しているが、明日にはラシヤラ様の戴冠式の為に戻らないとならない。

「すぐに夕食の用意をするから着替えていらっしやい」

はーいと間延びな返事をしながら部屋に戻る

「さてと」着替えを終え、今日のレポートを机の上におく。

「後はこれ纏めるだけでいいかな」

夕食の後、頑張ろう「さてとご飯ご飯ッ」
少し浮かれながら、食卓に向かうエリアだった。

side トウヤ

「はぁ？」思わず聞き返してしまった。
まさか人を殺せとか言われるとは思わなかった。

「目標はシトレイユの皇ラシャラ＝アース」
忌々しげに言う金髪、よほど恨みでもあるのか？そんな事を考えてると

「成功すれば、元の世界に帰してやる」
これなら断らないだろう、そう金髪は考えていた。

「わかった、で何をすればいいんだ」

正直こいつに帰してやるとか言われても信用できない。仮面だし。
ここは話に乗ってから、後で考えよう。

で何をするのか聞かされたんだが、そのなんというか囧？
「トウヤ貴様には、護衛機師を引きつけてもらう、目標は私がやる」
なんか尤もらしい言い方をするが、ようは護衛を全部相手にしろ
ってこと。

「さすがに何人も相手には出来ないんだけど」

さすがのトウヤでもあまり大人数は相手に出来ない。

護衛っていうくらいだし、聖機人の扱いは向こうの方が長いし

「情報によれば、護衛は1人だけだ」

「その情報信用できるのか？」

1人だと思つて、何人も出てきたら面倒だ

「貴様が心配する必要は無い、すぐに出る。さっさと船に乗れ！」

「わかった。」

これ以上聞いても無駄と判断し、船のある港に案内してもらう。

船に向かって歩いていると

<私あいつ嫌い>蒼火がそんなこと言い出した。

<そう言つてやるなつて、まだガキなんだし>

あの金髪、これから苦勞しそうだなとなぜか不意に思ってしまった

<でも、これからどうするの？トウヤ>

<特に考えてない、けどなんとかなるよ>

あのマッドとか鬼姫みたいな無茶苦茶な人たちに比べたら大抵の事はマシだと思う。

正直この世界に来たのも、あの人達の誰かのせいだと考えている。鷺羽さんとかよく実験に付き合わされたりしたし、それで何度死にかけたか、今思い出しても腹が立つ。

帰ったら絶対文句言つてやると心に決め船に乗り込んだ。

side out

シトレイユ皇国「所属艦スワン

「しかし、邪魔じゃのうこれは」

大きな聖機人を指差す、広い格納庫に鎮座する聖機人。

「ラシヤラ様、戴冠式の間だけとはいえ、教会より借受が許されて……」

「わかっておる。マーヤが心配せずとも聖地につくまで、捨てはせぬ」

侍従長のマーヤは、そんなラシヤラを見て頭を抱えている。

「でもスゴいですね」

エリアは見上げるように呟く。

「そうですね、この「聖機神」はどこか荘厳な感じがしますね」

エリアの隣にたっているのは、ユライト・メスト、シトレイユ皇国宰相ババルンの弟。

今は、聖地学院で教師をしている。

「荘厳？誰も乗れん、ただの置物じゃ」

ラシヤラは、かなりバカにしたように言うが、聖機神この世界でも一体しか確認されていないため

文化的にも、研究資料としても国宝級の価値がある。

『ラシャラ様！、スワン前方に聖機人の亜法反応がっ』
突然艦内に、声が響く。

「なに？聖機人じゃと迎えではないのか？」

「いえ迎えの聖機人は手配していません」

ラシャラの護衛機師キャイア・フランが窓に駆け寄る

「あれは？白い聖機人？」

「白い聖機人じゃと？」

そこにはスワンの上を飛行する、白い聖機人が1体

「白い聖機人なんて、一体何者でしょうか？」

聖地の教師をしていて色々な聖機人を見てきたユライトにも
機体による聖機師の特定ができなかった。

聖機人の元へ走り出すキャイア

「キャイア！聞きたい事がある故、丁重にな」

そう指示を出し、ラシャラは白の聖機人を見つめていた
「まさかこんなところで襲撃とはの、甘く見ておったか？」
心なしか、その表情には笑みがこぼれていた。

side トウヤ

スワンに白の聖機人が現れる少し前。

そろそろ時間だな、閉じていた瞳を空へと向ける
「きれいだな」そんなぼやきが漏れる。

<さてと、蒼火いくよ。>
<うん。>

「さて、まずは護衛の機師を引っ張りだしてからだな」
待っている間に、一応の計画は立てた。

決して、ヒマすぎて寝てた訳ではない。

計画

- 1 護衛を連れ出す、金髪が出てくる
- 2 ラシヤラがピンチ
- 3 金髪をぶっ飛ばす！

「完璧だ！」我ながら良い考えだ。

蒼火が心配そうに声をかけてくるが「大丈夫！」そう言うておく。
動力炉が回転を始め、スワンに向けてトウヤは飛翔した。

side out

第三話（後書き）

ご意見感想などくれるとありがたいです。
では、次回もよろしく。

第四話（前書き）

ネタがないw

駄文ですヒマならどっぞぞです。

第四話

スワンの上に着地するトウヤ。

すると目の前の建物から赤い聖機人が出てくる。

「おっ尻尾付きか」

そうその聖機人には、赤い狐のような尻尾がついていた。

尻尾があるのはそれだけ優れた聖機師が乗っている事だ
「ということは、油断できないな」

「貴様！この船がシトレイユ皇国ラシャラ・アース陛下の物と知つての狼藉か！？ 答える気がないなら、チカラずくで聞くまでだ！
！」

幾度も剣と剣がぶつかり合う、かなりの衝撃に砂塵が舞い上がる。

鏑競り合いの状態から、「はあっ！」

トウヤが押し切るように剣を振る。

「くっ」

キヤイアはそのまま後ろに距離をとると。

「なんだ？掌が光ってる？」

キヤイアは亜法を砲弾のようにまとめ打ち出す、バンツとはじけるような音とともに強い光がトウヤの視界を染め上げた。

「目くらましか！？くっ！」

トウヤは殆ど反射的に、しゃがんだその上を剣の刃が通り過ぎる。

「なっ！？躲した」

しゃがんだまま後ろに跳びさがり、体勢を立て直す。

まさか、躲されるとは思ってもよらなかった。

「こいつ、強い」

両手で握る剣の柄に自然とチカラがこもる。

そんな時、突如爆発音が響く。

「なっこいつは囷か！？」

キヤイアは急いで爆発音の元に駆け出した。

そのとき、なぜか白い聖機人は追ってこなかった。

「どうやら、予定が狂ったな」

先ほどの戦闘中、金髪がラシャラに接触したのを遠目で確認していた。

やはり護衛はこいつだけじゃなかったな。

赤い聖機人が走り出すのを見送るトウヤ。

「とりあえずこれからどうするか」

そんなことを考えながら、ゆっくり歩みを進めた。

爆発音が響く少し前。

「ラシャラ様。警備隊への連絡はいかがいたしますか？」

マーヤはそう問いかけるが、

「アウラに借りを作るのもあれじゃ、キャイアにも面子というものがある。」

それに今頃連絡しても遅いじゃろうしの「

アウラ・シュリフォン。

シュリフォン王国王女、優れた女性聖機師で巡礼路警備隊の仕事をしている。

「でも大丈夫でしょう。キャイアさんほどの優れた聖機師なら……」
そうユライトは言うが、

「相手が1体ならばな」

そう、格納庫の搬入口に見た事も無い形状の聖機人が1体

「こやつも見えた事無いの、何者じゃ？」

ラシャラはその青い聖機人に問いかけるが問答無用。こちらに向けた掌に亜法が収束する。

反射的に、ラシャラの盾となる。エリア、ユライト、マーヤ

だが対人亜法弾の衝撃で吹き飛ばされた。

どうやら気絶したのか、声をかけても反応はなかった。

こんなところで死ねはせんと、逃げようとするが、聖機人の腕に遮られる。

「さすがは父上の新作、あとはコイツを始末すれば終わりだ」
青い聖機人は、剣を振りかぶった。

ラシヤラはその場で身動きが取れず、鋭い刃がこちらに近付く。
そのときだった。

「ぐっ！！」剣が爆音とともに吹き飛ばされた。

「なっスワンには聖機人は1体だけのはず！」
剣を吹き飛ばしたのは、筒のようなモノを構えた黄色い聖機人が1体。

「ギリギリセーフ！ 陛下を助けたのはポイント高いわね」

「ちっ！ 役立たずめ、囃も満足にできんのか」

ここは引くしか無いと青い聖機人は逃亡を謀ろうとするが

「逃がさないわよ、新兵器の実験、まだ試してないのが沢山あるんだから」

逃げたラシヤラは格納庫の上にあるテラスから今の状況を見てい

た。

「あの黄色の聖機人は、確かワウアンリーかあの兵器は結界工房のものか？」

いやワウアンリー自身が開発した噂の火薬とやらか、後で詳しく聞かねばな。

どうやらキャイアは先ほどの爆発音を聞きつけてこちらに向かって来ているようだ。

「しかし、あの白い聖機人なにゆえ見逃したのじゃ？」
仲間割れでもしたのか？そう思っていると

格納庫の搬入口から青い聖機人が飛び出してくる。
追撃するワウ、なにやら筒のようなものを構えている。

「なるほどあれがワウの發明か」
再び爆音響く、青の聖機人の右肩の装甲が碎ける。
「ほう威力は十分実用範囲じゃな」

とそこへ、キャイアが合流する。
「工房の聖機師が何用だ、ワウアンリー」

「詳しい話は後、今は」

さすがに2体相手では分が悪いのか逃げようとする聖機人に、再びワウの兵器が爆炎を放った。

その直後黒い影が青の聖機人を空に引つ張り上げられた。
「ドールか！？来るならもっと早く来い！」

「なによ折角助けてあげたのに、ここで落とすわよ」
「くっここは引くぞ」

「なっ！」テラスからその光景を見ていたラシャラ、その影は聖機人しかも黒

これで見えた事無い聖機人が3体。

「一体なにが起きておるのじゃ」
ラシャラは知らないところで何かが起きているか分からず不安になった。

黒い聖機人は、キヤイア、ワウの追撃を振り切ると、闇の中に消えて行った。

「こちらは片付いたな」
そうまだ白い聖機人が残っていた。

「してお主はどうするのじゃ？」
ラシャラの目の前には、白い聖機人が立っていた。

「どうもしないよ」
「お主男か？」
女ではない事にラシャラは驚いた。

男性聖機師は今貴重でその中に白いモノなど居なかったはずだからだ。

「できれば話がしたいんだけどできるかな？」

「うむ。私も色々と聞きたい事があるのでそれはかまわん」

とそこに赤と黄の聖機人が駆け寄ってきた。

「貴様！」突然剣を振りかぶってきた赤の聖機人。

「待て！キヤイアこやつは話がしたらしい剣を下ろせ」
「しかし！」

「キヤイア、ラシヤラ様のご命令だよ」
「ワウ！」

他の3人の視線がキヤイアに集まる。

「分かりました。しかし拘束だけはさせてもらいますから」
皆の視線に耐えられなくなったのかキヤイアが折れる。

白い聖機人がコクーンに戻る

「ああ、それはかまわないよ」

キヤイアとワウもまさか男とは思わず驚いた。

そうして、襲撃騒動は一旦幕を閉じた。

第四話（後書き）

原作キャラはここから随時登場予定です。

では次回を楽しみにしている人がいる事を祈りつつ頑張ります。

第五話

「しかしまさか異世界人とは、驚いたの」

「ええですが、現に白い聖機人など見た事ありませんし」

ラシヤラとキャイアの2人は廊下を歩きながら
先ほど聞いた事について話していた。

「お主の話を聞く限り、この世界ではない別世界から来たと」

「ああどうやってかは分からないけど、召還の遺跡にいたらしい」

「そのあとは話した通り、仮面に拾われてここに居る」

しかし異世界人とは、調べても召還されたという事は確認できなかった。
まあ異世界人ならあの白い聖機人の事も納得がいくか。

「ふむ、お主の話はわかった。でこれからどうするのじゃ？」

「特に考えてないかな、帰る方法も正確には分からないし」

そのわりには帰りたいそうには見えんな。

「それならどうじゃ、お主我の従者にならんか？」

「ラシヤラ様それは……」

「こやつの子カラは惜しい、それに他の国に取られるのは癪じゃし
の」

「俺はかまわないんだがいいのか？」

キヤイアって子がスゴい目でこっちを見る。
まあさっきまで戦ってたんだししかたないかな。

「よい、我がかまわんと言っている」

「それではよろしくの、我はラシヤラこっちが護衛のキヤイアじゃ」

「ああこちらこそよろしく頼む。俺は如月トウヤ」

トウヤを部屋に残して2人は聖機人を調べているワウの元へ歩いていた。

先ほどトウヤの話を聞くまで白い聖機人は何か特殊な加工がされていると思う

ワウに調べてもらっていたのだワウは優れた発明家で聖機工である。

調べてくれと頼んだら格納庫にすっ飛んで行った。

「でなにかわかったのか？」

「あつラシヤラ様」

「調べた結果から言いますと教会から供与されている基本的な素体でした」

「おそらく白く変化したのは機体ではなく聖機師のせいかと」

そうかやはりな、これでトウヤが異世界人であると確証がもてるな。

「ふむ、ところでワウよ、お主も我の従者にならんか？」

「ラシヤラ様まさかワウまで…」

「お主もワウの火薬とやらの威力直に見たである。」

「あれの他にも色々あるそうじゃしの」

そう問いかけるような笑みにワウももちろんです。

そう言いたげな笑みを返した。

場所は変わってラシヤラの執務室。

ラシヤラ、キャイア、トウヤ、ワウが集まっていた。

「今日からこの2人が我の従者じゃ、仲ようせいよ」

「へえゝあんたがああ聖機人の？」

「如月トウヤだ、よろしくワウアンリー」

「ワウでいいよ、トウヤ。こっちこそよろしくね」

「それでじゃ、集まってもらったのはトウヤについてじゃ」

「皆には、トウヤが異世界人である事は内密に頼みたい」

「どうしてだ？」思わずトウヤは疑問の声を上げた。

「うむ、召還には時期があつてのそれがここ最近では無理なんじゃ」と時期による召還ではなく別の方法で来た、こちらから呼んだ訳でなく

向こう側から送り込まれた、色々考えは出るが本人は覚えておらん。

「理由としては、召還された者は、召還した者の所有となる」ということは、だれがトウヤを呼び出したか分からない今はトウ

ヤが異世界人であるという事実は隠さねばならないらしい。

「なるほど、では名実共にラシヤラ様の所有と認められるまで秘密にしたいと」

「まあ簡単に言ってしまうえばそう言う事じゃな」

「わかりました」

一夜明けて、聖地学院の正門前にスワンは来ていた。

「ここが聖地ですか？」

「そうじゃ、教会の管理する洗礼の地でその中に学院があるのじゃ」

「学院て？聖機師のですか？」

「うむ大半は聖機師なるべく通う者じゃが、まあ詳しい事は向こうでの」

「あれは？」

トウヤが指差す方には、巨大な聖機人が運ばれていた。

「ああ、あれは聖機人の元になった聖機神じゃ」

「ラシヤラ様」

エアバイクに乗ったワウがこちらに来る。

「ではお先に失礼します、トウヤも後でね」

「しかし聖地に行くなら一緒でも良くはないのか？」
そんな疑問が生まれる。

「それは、聖地には古いしきたりがあってスワンは喫水外から入港するから

今のうちに運ばないといけないの」

「そうか、喫水外だと運べないからか」

運搬車の動力も亜法動力が使われている。

『ラシヤラ様、ただいまより聖地に入港いたします』

侍従長のマーヤさんの声が聞こえてくる。

「うむ、トウヤよ聖地では我の従者。そう思われるよう気を抜くなよ」

「そうですね、やはり第一印象は大事ですから、がんばります」
これからは周りに俺がラシヤラ様の従者であると認識されるまで気は抜けないな、と1人決意を新たにす。

スワンが港に入る、隣にはもう一隻の船が泊まっていた。

「ラシヤラ様、あの船は？」

トウヤが指差す方には装飾がすべて赤というなかなか奇抜な船が泊まっていた。

なぜかその船を見たラシヤラ様の顔が若干引きつる。

「到着早々嫌なモノを見たな」

それはもう嫌そうな声を出すラシヤラ。

「あれはハヴオニワの船よ」

キヤイアが代わりに説明してくれた。

どうやらハヴォ二八国はラシヤ様の叔母が女王で、その娘まあ従姉妹とは同年代だそうで同族嫌悪なのか少々仲が悪いとの事だ。

そんな遠回しな言い方をするキヤイアだが、これは少々所ではないなとラシヤラ様を見ているとそう思ってしまった。

しかし、これは困るな。

「なあキヤイア、なんでこんなに目立ってるの？」

そうなのだ、学院の敷地に入ってからというものの凄まじい視線をビシビシ感じるのだ。

「それは、ラシヤラ様は王族でしかも先日皇位を継いだばかりだから」
「ら」

「おいあれシトレイユのラシヤラか？」

「ああ先日皇位を継いだからラシヤラ女王だよ」

「ねえあの方ラシヤラ様の従者かしら？」

「ええでも従者はキヤイアさん以外居なかったはずよ」

「ラシヤラ様」

「ダグマイア・メストか」

ラシヤラ様がそう呼んだのは、金髪の優男だった。

メストってシトレイユの宰相の名前か、ということとは息子か？

<トウヤトウヤ>

<どうした？>

<コイツ、仮面のヤツだよ金髪の>

<そうなのか、しかしよくわかつたな>

<だって同じ感じがするんだもん>

「スワン襲撃の報を聞いたときはご心配いたしました」

「うむ、そうか心配をかけたなババルンもさぞ心配をしておろつ、後で無事を知らせてやれ」

もしかしてラシヤ様気付いてるのかな？

会話を見ているとそう思ってしまった。

ダグマイアの頬引きつつてるし。

「キヤイアも大変だったね、怪我は無いかい？」

「ええなんとかね」

俺の方に向くと今気付いたとばかりに

「それでこちらの方は、新しい従者の方ですか？」

つか知ってるだろうとか思っているが顔は出さない

「うむ、先日より我の従者となった。如月トウヤじゃ」

「如月トウヤです、よろしく」

一応頭を下げておくが目線が痛い。

目で会話が出来たら間違いないこう言ってる。

『この裏切り者め！！』

「では失礼いたします」

ダグマイアは従者かな女の子と共に去っていった。

一応襲撃犯のこと言っという方が良いかな

「ラシヤラ様、後でお話が」真剣な目で訴える俺

「わかった、では後で我の部屋に來いそこで聞こう」
そう言い学院長室に向かって歩き出した。

第五話（後書き）

所々文章が繋がっていないかもしれませんが、伝わる事を祈ります。

第六話（前書き）

少々遅くなりました。
待ってた人ごめんなさい。

第六話

（なあキヤイアこれどうにかなんないの？）

（無茶言わないでよ、巻き込まれなくなかったら黙ってなさい）

そう今は学院長室に来ているんだが、女神様の悪戯か？

そう思ってしまうくらい、部屋の中はヤバい事になっていた。

「スワンが襲撃されたと聞いて心配していましたのよ」

「心にも無い事を申すな」

ラシヤラと言い争っているのはハヴオニワ国の王女マリア・ナナダン

さっき言っていた少々仲の悪い従姉妹殿である。

仲の悪さは少々どころではなく、部屋で鉢合わせしたときは、もうなんというか空気が凍った。

「心にも無いなんて心外ですわ、あなたのせいで周りに迷惑がかかるかと思うと心配にもなりますよ」

「うぬゝ言わせておけば、我はもう国王となった身じゃもうちょっと敬わんか」

「あら人望が無くて暗殺されかけた国王様のどこを敬えと？」

もうなんかダメだ、売り言葉に買い言葉というか端から見れば、子供同士の争いである。

とても一国の王と一国の王女の話し合いでもない。

「やってることは子供みたい」
つい、ホントについ口から出てしまった、マリアの視線がこちらに向く。

「ラシヤラ・アース先ほどから気になっていましたがこの方は？」
「おおそうじゃった、こやつは先日より我の従者となった、如月トウヤじゃ」

「はじめましてマリア様、如月トウヤです」

「あらご丁寧に、私はハヴオニワ国王女マリア・ナナダン
そして彼女が私の従者でユキネ・メアよ」

「ラシヤラさんのお守りは何かと大変でしょうけど頑張ってくださいね」

なんてこと言っんですか！ああ、すごい睨まれてる。

「皆さんおまたせ致しました」

いいタイミングで学院長登場。

「どうかなさいましたか？」

学院長が気を利かせたのかそんな事を聞いてきた。

「「いいえ、何でもありません」」

こういうところは息が合う2人だった。

side ワウ

ワウの工房

「よし片付けは一先ずこのくらいで良いかな。ようやく就職も決まったし、後は儀式だけだし順風満帆 順風満帆と」

嬉々と今度の儀式のため、準備を進めるワウ。

／儀式とは、聖機師候補の者に聖機師の資格を与える、式典のことである。

資格を貰えば聖機師としての各国への就職が可能になる。

儀式にも有能な聖機師を引き抜こうと、各国の偉いさん方も訪れる。

ちなみにキヤイアもワウと一緒に儀式に向かう事になっている。／

「ねえあなた」

工房の入り口には3人の女が立っていた。

もはや嫌な予感というか嫌な事しかおこらない空気だった。

s i d e o u t

「まったく酷い目にあつたわ！」

ベンチに腰掛けラシャラが先ほどの事を思い出しているのか、機嫌がすこぶる悪い。

「それにしてもこの首輪どうにかなりませんか？」

話題を変えようと自分の首につけられた首輪を指でつまむ。

「我慢せい、それはお主の入寮許可証なんじゃからの」
いや人に首輪ってどこの家畜ですか。

でもこれが無いと寮には入れないし色々困るらしく外せない。

「しかしこの程度で弱音を吐いていてはこれから大変じゃぞ」

「そういえば俺の仕事って何するんですか？」

従者になるっていつでも何をするのか聞いてなかった。

「キャイアみたいに、聖機師としての護衛ですか？」

「うむそれでもよいのじゃが、今そうすると色々となあ」

「色々って？」

「トウヤはこの世界の聖機師についてどの程度知っておる？」

少し考えるように唸るトウヤ

「そうですね、聖機師になれるのは高い亜法耐性のある者だけでその数が限られている。ってことくらいですかね」

「概ねトウヤの言う通りじゃが、聖機師にはある義務があるのじゃ」

「義務ですか？」

「この世界において聖機人は絶対兵器。

ゆえに能力の高い聖機師を生み出すため、国によって聖機師の結婚は管理されておる。

それに加え現在は女性聖機師の比率が極端に高いこともあって男性聖機師がとても貴重でな、婚姻も恋愛すら国に管理されているのじゃ。

女性聖機師の場合は男性聖機師と子供さえ作れば、男性聖機師以外との自由な婚姻や恋愛もできる」

そんな話を聞かされたトウヤは嫌な汗が止まらない。

「あの、そんな時に俺が聖機師ってバレたら……」

「うむお主ほど聖機師なら、大変な事になるじゃろうな」

そんな満面の笑みで言われても、これから考えると不安なる。

「それならどう「ああ〜キヤイア!」し」

「ワウ、どうしたのそんなに慌てて?」

息を切らせて飛び込んできたのはワウだった。

「お願い!立会人になって!」

第六話（後書き）

なんか終わりが見えない。

第七話（前書き）

じゃじゃあんw w w
更新だ〜！！

——次は何時になるやらw

第七話

「浪人？」

「ええ、一般的に無職の聖機師の事をそう呼ぶのよ」

先ほどワウから、立会人になってと言われたキャイア。

「でもそれとこの試合？ 何か関係あるのか？」

トウヤとしてはそこが疑問だった。

「おそらく、従者のワウに勝てばラシヤ様の目に留まるとでも思っているんでしょうね」

「それって就職活動みたいなモノってことか」

「簡単に言えばそういうことね。教会から国に供与される聖機人は数が限られてるから、どうしてもこういうことが増えるのよ」

どうにかして就職するにはすでに決まっている者よりも自分の方が有能である事を示さないといけない。

自身の有能さを示すのに手っ取り早い手段が決闘らしい。

「でもどうしてワウなんだ？ キャイアの方が昔から従者なのに」

そうラシヤ様の従者として名が知られているキャイア。

そのキャイアに勝てば自身の有能さを示すことにもなる、しかも勝てなくても善戦すればたとえ負けたとしても他の就職先が見つかる可能性もあるからだ。

「まあ理由としては、私よりも聖機工で技術者のワウなら勝てると思っただけでしょう」

分かる気もするけど。聖機工であるワウに勝ったとしても、それほど意味はない。

あくまでワウは技術者であり、その腕を見込まれて従者になったのだそれに勝つてもしかたがない。

とはいえこうして決闘までするんだ、なにか考えでもあるのか？
でもなあ……そんなんで勝つてもラシヤラ様は雇わないと思うんだけど。

「まったく不愉快じゃっ！」

「ワウに挑戦するという事は、雇い入れた我の目を疑われたという事じゃ」

「やっぱりというか案の定、機嫌悪くなってるしこりゃあの浪人に就職は無理だな。」

舞台上目を向けると、ワウは甲冑のようなモノに乗り込んでいた。
「なあキヤイアあの甲冑は？」

「「あれは」あれは動甲冑よ。なんか面白そうな事やってるのね、キヤイア」

どこからとも無く声が聞こえ、後ろを振り向いたキヤイアの様子が固まってる。

キヤイアの視線の先には、キツチリスーツを着こなした、桃色の髪的女性。

「メザイア姉さん、どうしてここに？」

姉さん？ てキヤイア姉妹いたの？

「そりゃあこれだけ人が集まればいやでも目立つわよ。それに教師も居た方が良いでしょう」

指摘されて改めて周りを見渡してみると其処等中に人集りができていた。

決闘ってこんなに人が集まるモノなのか、キャイアに聞いてみたら人集りの理由は、善くも悪くも色々と有名なラシヤ様のおかげらしい。

そんな話題の人の従者が決闘するなんて言ったら注目が集まるのも無理は無かった。

「で、この子のことは紹介してくれないの？」

「こやつは、先日より私の従者になった、如月トウヤじゃ」

「そうなの？ はじめまして、ここで教師をしているメザイア・フランよ。よろしくねトウヤちゃん」

「トットトウヤちゃん！？」

「あの、さすがにちゃん付けは恥ずかしいんですけどメザイ「お姉ちゃん」へっ？」

「トウヤちゃんにはお姉ちゃんと呼んでほしいわ」

なんというか雰囲気、子供っぽい感じ、もう嫌な予感しかない。

助けを求めようとラシヤ様とキャイアに縋るような視線を送るが揃いも揃って首を横に振る。

（あきらめなさい厄介な事になる前に）キャイアからのそんな目線？ を受けここで折れとかなないと、マズい事になるそんな気がした。

「もうトウヤちゃんでもいいです。メザイア姉さん」

「うれしいわ、弟ができたみたい」

トウヤがそう呼んでみるとメザイアはそれはもう満面の笑みで抱きついてくる。

「姉さん！ 生徒の前ですよ」

キツイ口調で否めるが、そんなのは何処吹く風。

2人の力関係がよく解る、キャイアも苦勞してるだろうな。

「キャイアゝ 準備出来たよゝ」

動甲冑に乗り込んだワウがこちらに手を振っていた。

「キャイア呼んでるわよ」

渋々キャイアは舞台の傍による。

「両者前へ！」

キャイアの声を聞きワウと浪人の動甲冑が舞台の中央に立つ。

「なるほどあの舞台に亜法が発生してるのか」

「あら？ よくわかったわね」

「まあなんとなくですけど」

「ということは、あの甲冑って舞台の上でしか動かないってことなのか？」

「そうよ、動甲冑には動力炉は付いてないからこの舞台の上か有線の動力供給がないと動かないの」

メザイア姉さんの説明はさすが教師だけあって非常に分かり易かった。ようは訓練だけで戦闘には使えない訓練機。

「と、そろそろ始まるみたいね」

舞台に視線を向ける。

「立会人は私、キャイア・フランが勤めます。では――始め！」
キャイアの声が合図となり二体の動甲冑がぶつかり合う。

浪人の攻撃はあまり丁寧とはお世辞にも言えず。

これはワウの勝ちかな、ラシヤラ様の襲撃の時ワウの操縦を見ていたトウヤ。

そのときのワウの力量からしても浪人に勝ち目はないだろうと考えていた。

side ワウ

最初は乗り気ではなかったがここまできたらやるしかないそう気持ちに踏ん切りをつける。

「キャイア〜 準備出来たよ〜」

そうキャイアに言うのと浅く息を吐く。

「立会人は私、キャイア・フランが勤めます。では——始め！」
合図と同時に前に踏み出す。

バシユッ

私と相手の剣がぶつかり合う。

さすがに相手も聖機師の資格を持つてただけある。

徐々に防戦に持ち込まれていく、だが

「狙い見え見え！ なっ！」

side out

「ん？」

「どうしたの？ トウヤちゃん」

「いや、今ワウの甲冑動きが……メザイア姉あの甲冑って改造とかできるの？」

「できないこともないけど、どうしたの？」

「いや、まだ何とも言えない」

トウヤが感じたのは一瞬の違和感、さっきの攻撃。ワウ避けなかった？ いや反応はしていたが避けられなかった？

side ワウ

ギンッ

「反応が鈍い！」

ダメージ判定を受けた右腕を見る、まさか操作回路弄られてる？

そうだとすると、いまさら

「油断してたわ、まさかこんな手を使ってくるなんてでも、それでも」

「やるしかないよね」

だが

「あっ！」

ダメージ判定を受けた右足の大腿部。

やはり回避動作がおかしい。

避けたはずなのに機体の反応が追いついてこない。

「まずいわね」

思い通りに動かない機体、徐々に追い詰められていくワウ。

side out

今の攻撃でトウヤの疑念は確信に変わる。

「やっぱりか、キャイア!!」

「トウヤちゃん？」

「なに今はけつ」「この決闘やめさせろ」「はあ？」

「浪人の奴、ワウの動甲冑に細工してる」

「なっ!?! 本当なのそれ」

「ああ、ワウの動き所々に違和感が出てきてる」

「キャイア、私もそう思うわ最初は気付かなかったけど徐々に動きが鈍ってる」

「キャイアやめさせろ」

「ラシヤラ様」

「トウヤ、間違いないんじゃないな」

「どうみてもワウの動きがおかしい、実戦も見ているからよくわかる」

三人の視線を受けキャイアが声を上げる。

「そこまで!! 両者そのまま動かないで!!」

突然の静止。

周囲に静けさが広がる。

二体の動甲冑の元にトウヤ、メザイア姉、キャイアが近づいていく。

（メザイア姉、動甲冑の中調べられる？）

（ええ大丈夫よ、これでも教師ですからねまかせて）

「どうしたのキャイア？」

「ワウ、分かってて聞いてるだろ？」

ワウはやっぱりとそんな顔をする、どうやら本人も分かってるみたいだ。

「これはどういうことですか！！」

浪人が動甲冑から降りこちらに歩いてくる。

「突然決闘を中止させるなんて！！！」

細工なんかしてよく言うよ、少しムカついてきた。

「トウヤちゃん、間違いないく細工されてるわ」

トウヤの予測通り、操作系の回路に細工がされていた。

「やっぱりか、でどうするんだお前？」

「そんなの知らないわよ」

シラを切ろうとしているが

「この動甲冑、準備したのお前だろ？」

「……………」

怒った次はダンマリか、とことんアホだな。

そんなことすれば肯定したも同然なのに、しかたないな。

「まさか、爆破装置を使うなんて、一步間違えば死人が出てるぞ？」
キヤイアが目を見開いてる、メザイア姉は俺の考えが分かったのか、悪い子ねそう言いたげな顔をする。

「なっ！？爆破装置なんか知らない！ 私がしたのは操作回路だけ」

やっぱりアホだな、こんな誘導に引っかかるなんて

「正解。細工は操作回路だけだよ、よく分かったね？ まだ何も言っていないのに」

しまったって顔してるけどもうチェックメイト。キヤイアは呆れて、何も言えずにいる。

とそこへ、浪人にとっては最悪の敵が登場。

「お主、よくもこんな茶番に付き合わせてくれたな、なにか礼をせねばな」

もう言葉の端々に棘が、でも自分の従者にケチ付けられて拳句にこんな茶番。

まあ怒るのも無理はないか。

「あつあの……」

「とりあえず、聖機師の資格剥奪そして聖地からの追放が妥当か」
どこの魔王ですか、あなた。冷え切った目を浪人に向けるラシヤ様。

「そっそれだけは……」

もう恥も何もなく、土下座。

これはもう自業自得だな。

まあそんなことしても、無駄だろうけどな。

案の定。

「とりあえず、処分の決定は学院長に任せておく。メザイアあとは」
「はい、了解しています」

「さて、阿呆共のことは任せて、我等は寮に帰るか」
「「「はい」」」

メザイア姉に連れられて行く、絶望感漂う浪人、ご愁傷様。
とはいえ、自業自得というものの、同情する余地はない。

寮への帰り道。

「でも助かったよ、ありがとねキャイア」

「礼なら私じゃなくてトウヤに言いなさい、最初に気付いたのはトウヤよ」

「そうなのトウヤ？」

「ああ、まあな」

「そっか、ありがとねトウヤ」

そうして聖地学院での決闘騒動は終わりを迎えた。

第八話（前書き）

指摘及び感想は随時募集中です。

出来る限り気を付けてはいますが、ここはこうじゃないのか？
などの

ご意見など、あれば遠慮なくどうぞ。

* 誹謗中傷的なモノはご遠慮ください。

第八話

<トウヤ、トウヤ>

<う…ん？ どうした？ 蒼火>

ベッドから体を起こす。

<起こしてって言ったのトウヤだよ>

<そうだったな、悪い>

少し前、寮に帰ってきてそのまま寝てしまつて、二時間くらいで起こしてって蒼火に言っていたのを忘れていた。

どうやら自分で思っていた以上に疲れていたようだ、陸の上で寝るのは久しぶりだったせいもあつてか、体に疲れは残っていない。

此処の所、スワンの… ああいう揺れる場所ではさすがに疲れる。

樹雷の船ならさすが最先端といったところか、多少でも揺れる事はない。

その点、こちらの船は、ある程度は軽減されているけど連日となると辛いものである、ようは慣れてないだけだが。

<そうだとウヤ少し前、キャイアとワウが来てたよ>

<二人が？>

<うん。なんか『まったく静かだと思ったら……』とか色々言つてたよ>

あちゃ～まずったな、それにしても

<それなら起こしてくれてもよかったろ>

<声は掛けたよ、でも全然反応しなかったんだもん>

あゝごめん、それにしても部屋に誰か来ても気付かないって。
「まずいな」 すこし気が抜けてたかも」

少々反省。

「よっしゃー!!」

気合を入れなおして、ベッドから立ち上がる。

とそこへ。

「おつようやく起きたか」

現在の上司であり雇い主でもある。

「ラシヤラ様？ 何か御用ですか？」

「うむ、先ほどキヤイアたちが呼びに行ったら、寝ておるといっておったからの少し時間みてきたのじゃが」

「あつそうなんですか？ すいません、少し疲れていたようで」

どうやら、スワンから寮に持ってくる荷物運びの手伝いを頼もうと呼びにきたらしかったが

「寝ておったので、そのまま放っておいたのじゃ」

しまったな、この寮で男手は俺一人そりゃ呼びにも来る。

今から手伝ってきますと、足早に部屋を出ようとすゝトウヤ。

「よい、ちょうど今はこの寮にはお主と我しかおらん」

そこまで言われて、先ほど自分が言ったことを思い出した。

「なにか話があるのだろう？」

「はい、先日の襲撃犯についてなんですが」

「……そうか、ダグマイアの奴が」

「ええ間違いない、ただ裏で動いているのがダグマイア一人ではないかと」

「すると、ババルンか？」

「ババルンですか？ 皇国宰相の」

「うむ、おそらくはな」

「本人に会った事もないので何とも言えませんが、このような浅慮な方ですか？」

そうあの襲撃時、ダグマイアの機体を助けた黒い聖機人。おそらく他の聖機人とは桁が違う。

俺でも勝てるかどうか、無論無傷ではすまないだろう。

そう考えるとなぜ最初から出て来なかったのか？

ラシヤラ様を確実に殺害するつもりなら、初めから黒い聖機人を使えばよかった。

そしてダグマイアを助けた時に俺の通信に聞こえた声。なぜ味方なのに、ダグマイアはドールと呼ばれる子がここにいることに驚いていた？

それに俺が聖機人の訓練を受けた場所にドールと呼ばれる子はいなかった。

「となると、あの黒い聖機人ドールは別のアジトから来た」

そう考えれば、ダグマイア一人ではなくある程度チカラのあるバツクがいる。そう結論が出ることは何らおかしいことはない。

「色々考えてみると、おそらくですけど先の襲撃はダグマイアの独

断あるいは、試した？」

「試したとはどういうことじゃ？」

「試したのはダグマイア。ラシヤラ様は様子見そんな感じがします。ダグマイアがどの程度使えるか試すついでにラシヤラ様を殺せれば……そう考えたのでは？」

「なるほどな」

「ほとんどが推測の域を出ませんので、それに向こうにも色々事情があるでしょうし」

「そう此処までの考えは、暫定的な推測。アタリかもしれないがハズレの可能性も十分に考えられた。」

「ふむ、じゃが裏にババルン、実行犯にダグマイアがいることは間違いないじやろう」

「そうですね、となると聖地でも気は抜けません。マーヤさんとかにも話しておいた方がいいでしょうね」

「此処にはダグマイアそれに、ババルンの弟もいる。警戒しておいても損はしないだろう。」

「そちらの方は我に任せておけ、じゃがキャイアには話さんほうが良いかも知れんな」

「……？　なぜです？　護衛のキャイアには話したほうが……」

「なんで話さないほうがいいのかトウヤには理解できなかった。」

「言おうか言うまいか悩むラシヤラ様、なにかいえない事情がとか考えるが。」

「ラシヤラ様が話した内容は、」

「……惚れておるのじゃ」

「はっ??？」

トウヤの予想を斜め上に外れた。

とりあえず話し合いの結果、マーヤさん、エリア二人には話すと。

そしてワウ、でキャイアについては後々機会を見て話すことになった。

とはいえこの時は、キャイアに話すことを後回しにしたのが後々ややこしいことになるとは、トウヤもラシャ様も想像だにしていなかった。

第九話 日常的一幕（前書き）

気分転換に書いてみたw

本筋とはあまり関係ないので、ヒマならどっぞぞですw w

第九話 日常的一幕

side エリア

こんにちは、エリアです。私いま大変困ってます。

「ないよ」 どこにやったんだろう」

今の私を見ると、皆おかしな子を見た様な優しい目になります。

でも、今の私に周りのことなどout of 眼中です!!

「がんばってやったのに、レポートが……ないです」

そう頑張って頑張って作り上げた、私の結晶が消えた。

「終わりました、もう私はダメです」

ガクリ。手と膝を床につく、絶望その一言がエリアの背中に突き刺さる。

その時でした。

救いの神が光臨したのは。

「どうしたの？ エリアちゃん」

沢山の本を抱えたトウヤです。

side out

トウヤはこの世界の勉強をしようと、スワンの資料室とマーマヤさ

んの蔵書の一部を抱え寮の廊下を歩いていた。

すると

「終わりました、もう私はダメです」

と絶望感漂う声が通りかかったエリアちゃんの部屋の中から聞こえてきた。

なにかあったのかと、部屋の中を覗き込むと上記な感じのエリアがいた。

「どうしたの？ エリアちゃん」

とりあえず事情を聞こうと声を掛ける。

「トウヤ、私はもうダメなんです。もう放って置いてください」

なんともまあどうしたら此処まで、落ち込めるのか聞きたくなるほど落ち込んでいた、どうしたのか理由を聞いてみると。

「実は……で……失くしちゃったんです」

どうやら、苦心の末書き上げたレポートを失くした様で、しかも提出まであと三日という。

「課題は何についてなんだ？」

「創世記ですけど、いまからじゃ私にはむ「俺覚えてるけど？」はっ？？」

「トウヤ今なんと言いましたですか？」

なんか言葉遣いがおかしくなってる。

「いや、この世界の勉強しようと思ったらマーヤさんが「それなら創世記から学べばよろしいでしょう」って、なんか「この世界の歴史や文化の元は創世記にほとんど書かれています」だって言っ

……」

「ああ〜」

それを聞くとエリアの拳動が益々おかしくなる。

「だから、創世記なら暗唱できるくらいまで読んだんだよ。で今は各国の現在の情勢とかの勉強に資料を借りに「手伝って!」「はい?」「エリアはトウヤに飛びつき縋り付くとそんなことを言い出した。

「私ひとりじゃできないの、おねがい!」

「いやでも、そういうのは一人でやらないとダメなんじゃ」「そう言っても、なお縋り付くエリア。

「それは分かってるんです、でも私はあなたが居ないとダメなんです」

そこまで言われるとなぜか罪悪感が……。

「お願い。私を捨てないで!」

「いや、捨てると……か」

不意に後ろから視線が——はっ!

「トウヤ、お主」

「あんた」

「……」

ラシヤラ様、キャイア、ワウの順。

「あのこれは……違うんです」
もう視線が冷たい。

しかも

「お願いします、トウヤ様！」

涙を目に浮かべ懇願するエリア。

「『サイテー！』」

満場一致の冷たいお言葉。その場の空気は酸素ゼロ、文字通り死にます。

そこからの弁解に一時間、エリアのレポート作成助手に四時間。

<なあ蒼火、俺が悪かったのか？>

<トウヤは女の敵だねw>

<笑い事じゃねーよ！！>

そんな日常的一幕。

第十話（前書き）

指摘及び感想は随時募集中です。

出来る限り気を付けてはいますが、ここはこうじゃないのか？
などの

ご意見など、あれば遠慮なくどうぞ。

* 誹謗中傷的なモノはご遠慮ください。

第十話

「おいしい！ エリアまた腕を上げたわね」

キャエアの感嘆の声上がる。

「えへへ、わかりますかキャエア。この前の休暇中お母さんにレシ
ピ習ったんです」

今は寮のリビングというか談話室に皆で集まっていた、ラシャラ
様、キャエア、ワウ、エリア、マーヤさん、そして俺だ。

「そういえば、エリアの母上は元々料理人じゃったのう」

「はい、元々は聖地で働いてたんですけど体を悪くしてしまって」

「ああ、……すまぬ」

「いえ、いいんですよ。もう昔のことですから、今は小さな料理屋
でがんばっていますから」

エリアの母は、昔聖地学院で料理長をしていたのだが、体を悪く
してしまい。

現在は生まれ故郷で、小さな料理屋を営んでいる。さすが元聖地
の料理人だけあって、かなりの人気店になっている。

未だにうちで働かないかと貴族などからの勧誘もある鉄人。

「トウヤ？ さつきから黙ってるけど口に合わなかった？」

ふと気が付いたのは、先ほどから私の作ったお菓子を見つめてい
るトウヤ。

「いや、俺の故郷のお菓子に似てるんだよ。それでちょっと懐かし
くてさ」

懐かしの和菓子どら焼き、樹雷でも和菓子の人気はすさまじく数
多くのブランドが立ち上がっているほどである。

（瀬戸様も、甘いもの意外に好きなんだよな、よくパシリにされたっけ）

人気の火種になったのは、樹雷皇第一皇妃・船穂様が好物だったこともあり、船穂様の出身である地球の和菓子が最高級というか、樹雷に出回っている物の原型であつた性もあるのか、よく地球まで買いに行っていた。本当は地球には行つては行けないんだがそこは鬼姫の権力で文句は言われない。

実際地球側は、樹雷の存在自体知らない。そこで出てくるのが銀河法である、色々あるけど簡単に言えば、初期文明の世界への干渉の禁止。

銀河には様々な星があり、文明が発達してる所もあれば、地球の様に未だに宇宙開拓などしていない所も存在するために存在するのが銀河法である。

（まあ例外はあるんだけどね）

「そうなんですか？ このお菓子は異世界人が聖地から広げ始めて今では聖地の名物になってるんですよ」

「——もう何でもありだな異世界人」

そんな癒しの日常。学院が始まるのは二日後の儀式の後、それまでは束の間の休息である。

「でもその儀式って俺が出て良いものなんですか？」

聖機師認定儀式。

聖機師としての資格を与える場であり、各国の王族なども参加する。聖地学院きつての一大イベントである。

そんなところに俺なんか出て良いものなのか？ 自分でも疑問に思う。

「お主は私の従者、出てはいけない道理はない。それにこれは私の従者だと周囲にアピールできる良い機会じゃ」

ラシヤラ様良く考えていらっしやる。しかし出席者の二人キヤイアとワウが頭を抱えているがこの際見なかったことにしよう。

「まあトウヤの儀式参加は確定じゃ、異論は認めんぞ。それでなその後の話になるんじゃが」

「後って言うと、儀式の後ですか？」

そういえば従者としての仕事は何も聞いてなかったな。

「うむ、お主学院の臨時職員として働いてみんか？」

「臨時職員ですか？ 学院の」

臨時職員とか言われてもいまいちピンと来ないトウヤ。

「そうなのじゃが、仕事内容は引き受けてくれたら話すそうなので詳しくは我も知らんのじゃが」

「そうですね、俺としては構いませんよ。寮にいてもあまりする事ありませんので」

そうなのだこの寮の管理は全てマーヤさんがやっていて、それにサポート役にアンジェラさんにヴァネッサさんという人も居る。

ほとんどのことはこの三人がしているし、エリアも学院に通っているのではつきり言っただこの寮でトウヤの仕事は皆無であった。

「ですが、あまり専門的なことはできませんけど大丈夫ですか？」

「その辺りは、向こうの者に任せてある安心せい、聖地の職員は優秀じゃからの」

「そうですね、では何時頃顔を出せばいいのですか？」

するといつの間にかマーヤさんが手に持っていた、一通の封筒を

渡される。

「さすがに仕事が速いですね」

「いえこれが仕事ですから、明日こちらを学院長にお渡ししてください」

「わかりました」

こうして、ラシヤラ様の従者兼暫定聖地臨時職員トウヤが誕生した。

「なんか、仕事じゃなくて肩書きばかり増えるな」

「そこは気にしちゃダメだよトウヤ」

ワウに慰められる？ トウヤだった。

——翌日 学院長室

「確かに、ではこれから適正審査を行いますのでこちらに」
早速言われた通りに、学院長室に来ていたトウヤ。

「あの適正審査って？」

「ええ、ここ聖地の職員は色々な職種に分かれて作業しています。ですからどこに合っているのか初めに全ての部署に行って頂きます」
とまあそれが適正審査らしい、んで今は聖地での生活管理を取り仕切っている職員長の元に向かっているらしいのだが。

しかし、遠いな学院長室から歩き出してすでに十五分。
今は恐らく地下に降りているはずだが俺にもよく分からなくなっ

てきた。

「ここですよ、ハンナさん」

重厚な鉄扉をノックする学院長、ハンナさんていうのは職員長のことだろう。

扉を開けると中はさながら管制室のようになっていて、沢山の監視モニターがめまぐるしく動いていた。

「おや学院長、でその子かい新しい職員は？」

その声を掛けてきたのはツナギ姿の女性、たぶんこの人がそうだろう。

「ええ、如月トウヤ君です。では後のことはよろしくお願いしますね。」

「まかせときな、決まり次第連絡しますので」

「ではトウヤ君後のことは、ハンナさんこちらの方に任せますので頑張ってくださいね」

「あっはい、ここまで有難うございました」

「では私は仕事に戻ります」

学院長はそういつと部屋から去っていった。

「さてと、ここで職員長をしているハンナだ、よろしくなトウヤ」

「如月トウヤです。こちらこそよろしくお願いします、ハンナさん」

適正審査中……。

——省略。

「すごいね、アンタ！」

「いや慣れてますんで」

「事務処理、軽作業（力仕事）、家事、うん。これならどこでもや
つていけるね」

「では」

「もちろん合格だよ。仕事に入ってもらうのは儀式の後からだ詳しく
くはあとで寮に連絡するよ」

「わかりました。これからよろしくお願いします」

「ああこっちこそ期待してるよ」

やはり色々とやっておくものだな。

料理とか洗濯とかも樹雷じゃ全自動いわゆるボタンひとつなのに
『自分一人で行えるようになっておいた方が良く』そう言われが
んばった甲斐があるな。

何のハプニング、アクシデントもなく無事適正審査は終わった。

<平穏で素晴らしいな>

<そうだねトウヤ>

さっさと寮に戻って、ラシヤラ様に報告しないとな。

適正審査のとき色々と回ったので、もう迷う心配はない！

そう自信たっぷりにはンナさんから教わった。ラシヤラ様の寮へ
の近道を進んでいくトウヤだった。

「……………」

「……………」
「……………?？」

<トウヤ?>

ふふっ 神様。

俺の平穏な一日はそんなに面白くなかったかい??

「ふふっ そうだよ 人生ってさ、道を探すところから始まるんだよ。
そういうなれば俺は今道を探して……………」

<迷子?>

迷子だってははっ

「ここはどこですか!？」

絶叫。寮に向かって歩いていたはずが、なぜか森の中。

そこに頭を抱えた、イタイ感じの少年が居ましたとさ（笑）

<がんばれトウヤ!!>

トウヤの一日はやはりこんな感じになるのですた。

第十一話（前書き）

指摘及び感想は随時募集中です。

出来る限り気を付けてはいますが、ここはこうじゃないのか？
などの

ご意見など、あれば遠慮なくどうぞ。

* 誹謗中傷的なモノはご遠慮ください。

第十一話

「ここはどこなんでしょう」

「寮はどっちですか」

シーーーーン。アタリに人影すらないのに返事を期待した自分が恥ずかしい。

当てもなく歩くこと数十分辺りは木木木、森です。何もない森。人が住んでるかどうかさえ分からない森。

Q：遭難ですか？

A：そうですね。

「——ん？……………つけられてるか？」

<蒼火、後ろに二人か？>

<うつん、三人だね少し後ろにもう一人居るよ>

誰だ？ 気配の消し方から中々の使い手だな、でも俺にとってはまだまだだな。

この程度なら素手でもイケるか？

どうするかな、此方から仕掛けるか？ いや話し合いで済むならそっしたいんだけど。

ヒュッ！

「——なっ！！」

後ろを振り向くと同時に、飛んでくるナイフを払いのける。
木陰と草むらから、顔を隠した男が二人。

< 蒼火、もう一人は？ >

< ううん、動いてないよ。様子見かな？ >

< さあな、一応警戒だけはしておいてくれ。とりあえず目の前の二人を片付ける！！ >

< わかった >

蒼火の返事が聞こえるまでの一瞬で木陰に居た男に間合いを詰めた。

「くっ！！」

焦った男が腰元から、ナイフとナタの中間位の刃物を横なぎに払う。

甘い！ 刃がトウヤの腹部に当たる前にその手首を右手で受け止め捻り砕く。

ベキッ！！「ガッ！」

スキだらけの顎に左手で掌底を叩き込んだ。

side ????

「くそ！」

草むらの近くに居た男は一瞬何が起きたのか分からなかった。
仕事を済ませようと接触したターゲットが目の前から……消えた。
仲間の声を聞きそちらの方へ目を向ける。

仲間の男が仰向けに倒れている、生きているのかどうかもわから

ない。

話と違うじゃねえか、どこが唯のガキだ？ 依頼人と敵を見誤った自分対して怒りがわいてくる。

だが依頼は依頼だ。ここで投げ出してはいいい笑いだ。
覚悟を決め、腰に差したナイフを静かに抜く。

「やるしかねえ」

s i d e o u t

あと一人。どうやら話し合いでは済まないな、まあコイツらから先に仕掛けてきたんだ悪く思うなよ。

顎への掌底で意識を完全に刈り取られ倒れ伏した男。

（死にはしないだろう）

さて後ろに立ってる、殺気満載の奴を如何にかしなひとな。

どうやら油断も無くなってるな、俺の見た目はまだガキだ嘗めるのも仕方ない。

あのマッドやら鬼やらに鍛えられたというより遊ばれた俺は、普通の人間には超えられない圧倒的な壁を超えた。

まあ俺は人間の枠から完全にはみ出してる存在、だが知り合いにも人外は居る。

鬼のように強い、てか鬼だし。

簡単に言おう、俺を殺したければ後百人はつれて来い。

ナイフを半身に構えてる男（どうやら剣術の心得が多少はあるんだろう）

だが

「はっ！」

マッドの研究いや人体実験と『皇家の樹：蒼火』からのチカラの供給による肉体強化。

その極限ともいえる肉体。そこから繰り出される掌底。

普通の人間には目視不可ゆえに回避もままならぬ一撃。

樹雷の闘士なら反応できるモノでも生体強化もしていない者が避けられるはずも無く。

「ぐへっ！」

鳩尾に右掌底がめり込み、吐しゃ物を撒き散らしながら男は崩れ落ちた。

<やったねトウヤ>

<まあこれくらいはな、少し強かったかな>

足元で胃液を吐き散らしながら痙攣している男を見ると少し可哀相になってきた。

<蒼火もう一人は？>

<もうどこかに行ったよ>

<そうか、まあコイツらが居れば黒幕が誰かは調べられるだろう>
とはいっても、まあダグマイアだろうなたぶん。

こういう時のトウヤの予想は外れたことがなかった。大体面倒なことになるんだけどな（汗）

「でも捕まえても帰り方がわかんないんじゃないかな、どうしようか」
途方に暮れるトウヤ、襲ってきたコイツらに聞こうにも気絶して
る。

「だれか人が居れば何とかなるんだけどな。——ん？」

<蒼火>

<うん人が二人……ううん三人近づいてるよ>

<でも敵意は感じない、コイツらの仲間ではないようだけど。考え
ても仕方ないな用心だけはしておくか>

<来るよ>

<ああ、それと蒼火他に何か居たら知らせてくれ>

<わかった>

「さてと、なにが出てくるかな」

第十二話（前書き）

指摘及び感想は随時募集中です。

出来る限り気を付けてはいますが、ここはこうじゃないのか？
などの

ご意見など、あれば遠慮なくどうぞ。

* 誹謗中傷的なモノはご遠慮ください。

第十二話

side ???

「それは真か」

侵入者。その報告が来たのはつい先ほどである。

「はっ、巡回の報告によりますと侵入者は三人。いずれも学院の者ではないようです」

「私に報告があるということだ……何があった」

通常の侵入者なら兵達が各々の判断で事に当たる。報告が来るのは捕らえた後になるのが通例になっていた。

だが今日の報告は通常とは違っていた。

「どうやら侵入者の内一人を狙って、後ろをつけていた二人が襲い掛かったのですが……」

「どうした？ ハッキリと申せ」

なんとも要領を得ぬ説明に苛立ちが募る。

「返り討ち遭ったのです。それもアウラ様とあまり年の違わぬ少年に」

「それは襲った二人の者が……」

「いえ気配からですが、我らの精兵と違わぬほどの者達でした。恐らく傭兵かと」

「いやだが」

我が娘アウラ。女子であるが戦闘に関しては国でも上位に入るほどでもある。

「いえそれだけではありません。巡回の報告によれば、桁が違った

自分にもいつ倒したのか見えなかったと」

「見えなかっただと？」

「はい、遠目ではありましたがいつ打ち倒したのか確認できなかったと」

倒したのは驚きでもあるが見えなかっただと。

「巡回の者の名前は？」

「はっシギナです」

「シギナか」

シギナ、まだ年は若いが無能で強さでいえば国でも十強に入れるほどの実力者。

「ふむ、ケルキとグナを呼べ我が出向く」

「王自らですか！？　しかし……」

「心配するな。むざむざやられたりはせん」

さて何が出るか少々楽しみだな、ふふっ

s i d e o u t

<来るよ>

<ああ、それと蒼火他に何か居たら知らせてくれ>

<わかった>

「さてと、なにが出てくるかな」

「少年っ！」

そんな大声が木の上から聞こえてくる。

「なんですか？ それとトウヤです」

「ではトウヤよ、話し合いの余地はあるか？」

突然言われてもな、話し合いで済めば此方としてもありがたいけど。

「姿も見せない人とは話し合いできかねます」

「いや失礼した。此方も侵入者には警戒しなければ仕事にならんでな」

木から下りて来るや否や気さくに話しかけてきたのは見た目はオジサンただ耳が尖ってる。

種族が違うのか？ 樹雷にも色々な種族は居るがこの世界にも居るのか？ それはいいとしても侵入者って、俺のことか？

「侵入者？ ここって……」

「我が国の簡単に言えば領地で私が国の王だ」

「もしかして俺がここに居るのって不味いんですか」

「そうだな、侵入者だからな」

「ええーと、ごめんなさい！」

国の領地に勝手に侵入、完全に俺が悪い。

「では少々話を聞かせてもらおうぞ」

「あつその前に、そこで倒れてる二人をお願いします。」

「ああケルキ、グナこの二人を頼む」

「はっ」「はっ」

「ではトウヤよ、付いて来てくれ我らの居住区がこの先にあるのでな」

「あっわかりました」

どうやら、すぐには殺されるようなことには為らない様で少し安心した。

——シュリフォン王国・聖地内領（居住区）

「うむ、お主の言った通り従者で間違いないそうだ。映像で確認を取ったので間違いない」

「そうですか良かったです」

「それと伝えてくれと頼まれたのだが、キャイア殿が帰ってきたら覚えてなさい。だそうだ」

ああ、伝言聞いたら帰りたなくなってきた。

「それと、トウヤ殿を襲った二人なのだが依頼主は仮面をつけた者
としか……」

「仮面ですか」

「ああ、なにか心当たりでもあるのかな？」

「ええまあ大体的見当はつきます」

シュリフォン王と色々と話をしていると。

バーン

突然部屋の扉が開いた、そこに居たのは褐色の肌に耳の尖った女性。
性。

「父上！」

「おおアウラ、どうしたのだ？ そんなに慌てて」

父VS娘の戦いが始まった。

なんとというか温度差のある二人だな。

シュリフォン王は水面の如く、謎の女性は烈火の如く。といった感じかな（笑

「王が自ら戦場に向かうとはどういうつもりですか！？ 今回は何事も無く済みましたが万が一があつてからでは遅いのですよ！？」
「どうやら王が自ら俺のところに出向いたのが不味かったようで、物凄い剣幕で怒っていた。」

さすがの王でも烈火の如き剣幕で怒られては分が悪いのか、「うむ」やら「はい」それはもう見るに耐えない程に意気消沈した受け答え。

結果〓シュリフォン王は燃え尽きた。

「ええそれはもう見事に真っ白でしたよ」↑居合わせたＴさん。

「……では今後、このような事は為さらない様にいいですね」

「済まなかった、今度からは気をつける」

俺が居なかつたら土下座でもしそうな勢いだな。

「それで、こちらの方は？」

「あっはじめまして、如月トウヤといいます。今はラシャラ様の従者をしています」

「私はこの国の王女アウラ・シュリフォン。如月トウヤか？ もしかして今度聖地の職員に……」

「そうですけど。あれ？ お会いするのは初めてですよね？」

「いやなに、学院長とは知り合いでな今日話した時に名前を聞いてな。もしかと思ったのだがどうやら人違いではないようだな」

「はい、そのトウヤであってますね」

何とか自己紹介も無事終わったのは良いのだが、「トウヤ殿、食事でもどうかね」まさかの王様直々のお誘い。

「ではお言葉に甘えて」

つい了承してしまったトウヤだったが（しまった。早く帰ってキヤイア達に謝らないと……でも）

「おお！ では宴の準備を……」

「……はっ」

いつの間にか王の下には従者の方達が

「さあ！ トウヤ殿今日は楽しんでくれw」

（もう無理です。今更断れません）

「はい」

「すまない。トウヤ」

「いえ気にしないでください。アウラ様」

「アウラでいい、私もトウヤと呼ぶからな」

「はい」

そんなやさしいアウラの言葉。胸に響きます。

（ふふっ、目から汗が……）

< 帰ったら土下座だね。トウヤ（笑） >
< 言わないで >

あきらめよう。成るようにしか成らない。

様々な考えが頭を過ぎる。

< —— 決めたよ蒼火！ >
< どうしたの？ 突然 >
トウヤは覚悟を決めた。

< 宴を目一杯楽しんでから帰って——土下座する！！ >
< ——……がんばって >

「トウヤ殿！ ゆくぞー！」
「はい！」

そうして嵐の前の宴に向けて歩みを進めるトウヤだった。

第十三話（前書き）

指摘及び感想は随時募集中です。

出来る限り気を付けてはいますが、ここはこうじゃないのか？
などの

ご意見など、あれば遠慮なくどうぞ。

* 誹謗中傷的なモノはご遠慮ください。

第十三話

「うん……？」

ここは……？ ベッドの上？

あれ？ 昨日は確か？

「思い出せない」

俺は何をしていた？ いやそもそもなぜ寮じゃない場所で寝ているんだ？？

<トウヤ。起きたの？>

<蒼火。俺は何をしている？>

<寝てたよ>

<いやそうじゃなくて、いやそうなんだけど。なんで此处で寝てるんだ？>

<トウヤ。覚えてないの？>

<覚えてないって？ どういうことだ>

<だって昨日——>

回想

「トウヤ殿！ 酒はイケる口かね」

「嗜む程度ですけど」

「ほお、これはシュリフォン名物の酒だな」

グラスに並々と注がれる酒。

「折角なんでもいただきます」

キューと一息に飲み干すトウヤ。それに気を良くした王様。

「ささ遠慮は無用ですぞ」

引つ切り無しに注がれる酒をトウヤは断れる筈も無く。

「いただきます」

回想終了

<—— だったよ。それで……>

蒼火から語られる昨日の蛮行。

二日酔いの頭を抱え、さしあたっての問題は。

「まずい。ラシヤラ様に連絡してない」

嫌な汗が背を伝う。さすがに記憶を失うまで飲んだのは不味かった。

トウヤは反省する時間も惜しいと急いで服装を整え部屋を出た。

勢いよく飛び出したのはいいが

「ここどこだ？ 多分離れみたいな所だろうけど」
道が分からない。

誰かに道を聞ければ良いけど。

「誰も居ない」

どうやらまだ皆が起きる時間では無いようで、周りに家はあるけど人が居ない。

<そつえば昨日ここまで運んでくれたアウラ。明日起こしに来るって言ってたよ>

<そうなの？>

<トウヤ酔ってたから……、一応返事はしてたよ。「おう」って>
全然記憶にございません。アウラに運ばれた記憶も無ければ、そんなこと言われたことすら覚えてない。

「それなら下手に動かないほうが良いな」

部屋に踵を返すとベッドの上に身を投げ出した。

どうやら昨日かなり飲んだようでまだ完全に酒が抜けていなかった。

視界がぼやけてくる。

<とりあえず寝るわ。おやすみ蒼火>

<おやすみトウヤ>

side ダグマイア

「——では、追って指示のあるまで勝手な行動は慎んでください」
「……分かっている」

それだけ言うと亜法通信機の接続は切れた。

／亜法通信機 〃 亜法を動力に使用した。 この世界での連絡手段の一つ。

通信相手とのホログラムによる会話が可能。 聖機人にも亜法通信機が標準で装備されている。

通信機としての完成度は非常に高く、録音 or 保存も可能になっている。 /

先日ラシヤラ襲撃の報告をした際。

ダグマイアの主張は纏めると、「手下が裏切った、自分の責任ではない」である。

自分に責任は無い、悪いのは裏切った如月トウヤであると。

最初は分かってくれると思っていた。しかし返ってきた言葉は父の辛辣な言葉だった。

「手下が裏切った？ それはお前が無能だからだ。」

「ですが、それは……ッ！」

「それに部下の責は率いた者の責でもある。その程度のことすらぬのかお前は……！」

「……………」

ダグマイアは黙り込むしかなかった。突きつけられた言葉は正論、否定しようも無い。

「―― 今後はユライトに任せる」

「――！ ですが父上……！」

「黙れ！！ 今後はユライトの指示に従え、以上だ」

これ以上の問答は無用。亜法通信機の接続は切れた。

「どうして俺があんな奴に……………」

怒り。悔しさ。様々な感情が胸に宿る。

ダグマイアは、叔父ではあるがユライトを快く思っていなかった。だが奴の指示に従わなければならない。その事実がダグマイアを苛立たせていた。

s i d e o u t

第十三話（後書き）

連投ですw

ここまでの話で変に思った所などありましたらご指摘お願いします。
できるかぎり対応します。

第十四話 剣士登場 上（前書き）

剣士が出てきた!!

一応三部作予定の一発目!!

第十四話 剣士登場 上

「ハヴォニワ国」

マリアとユキネが聖地に向かって一週間が経った頃

「フローラ様、予算報告と今日の会議資料です」

「あら今日も多いわね」

執務机の上にドサリと置かれた案件の山、ハヴォニワ国各地の貴族&商会の予算報告。

ハヴォニワ国では貴族と商会は、税收収益などを国に報告しなければならぬ義務があった。

「どうやら商会の収益が少々上がっていますから、重要なモノに絞ってもこの量です」

「そう……でも商会の収益が上がるのはこの国にとっては良い事なのでしょうね」

貴族の税金は大体一定の数字になっているが、商会の納税額は収益からの計算になっている。

収益が多ければ税金が増え、また逆もある。

フローラ・ナナダン 「ハヴォニワ国女王でマリアの母でもありラシャラの叔母でもある。

一見お淑やかな女性ではあるが、聖機師でもあり過去に聖地での大会で優勝したこともある武闘派。

「ではこの資料を人数分用意しておいて、それとこの山賊対策について何ですけど……」

「それについてなんですけど……その……」

なにか言い辛そうな女官に嫌な予感を覚える。

「なにかあったのかしら？」

嫌な予感がしても聞かない訳にはいかない。

それが重大なことなら尚更だ。

「実は山賊被害にあっていた村の者達がなんですけど……」

「どうしたの？」

「はい。実は被害に遭っていた村からの連絡だったんですが、村の商人が襲われ二名が死亡、その内一人が行方不明……」

続けられた報告は、非情なモノだった。

襲われたのは三人親子の商人で、死体が確認されたのは父親と母親の二人だけ、娘が居たらしいのだが恐らく賊に連れ去られた。

死体が出てない以上そう考えるしかなかった……。

「——近くの駐屯していた軍の者がその山賊達のアジトに偵察に行った所、そこはもぬけの殻だったそうです」

「もぬけの殻？ 場所を間違えたとかそんな事はないでしょうね」

「詳しい内容はまだ不明なのですが、確かに此方が確認した根城の一つがもぬけの殻になっていました」

此方が確認しているだけでその根城には二百人近くの賊がいたはずだ。

（一体なにが……）

「詳しい内容は、随時調査中です」

「では至急軍部に通達。先遣部隊には聖機師も付けて」

残党などが残っている可能性も考えられる。ここは安全を期するべきだろう。

「わかりました。詳しい内容が分かり次第連絡します」
「ええお願いね」

女官が執務室を出ると背もたれに身を預ける。

（行方不明のこの子、聖機師候補、近く聖地に向かうはずだった子みたいね）

手元にある資料には、写真が一枚貼られていた、笑顔が可愛い女の子だ。

「マリアと同年か……」

一人の母として、この子が不憫でならなかった。

フローラの元に報告が行く三日前

ハヴオニワ国边境の森

side 山賊A&B

「やっと見つけたぜ。どうするよコイツ」

「連れて帰るに決まってるだろ」

「だな。だがその前に……」

「ああ」

「「やらなきゃ損だろ！」」

山賊らの目の前には女の子が木を背に座り込んでいる。
どうやら襲われた怖さから腰が抜けてしまっているようだ。

「いや……」

「おいおいそんなに怖がるなよ。安心しな手荒なことはしねえよ」
「そうだぜ。暴れなきゃ余計に痛い思いもしなくて済む」

「大人しくしてれば優しくしてやるからよ」

これから賊が何をするのか、何をされるのか。

容易に想像ができた少女。逃げ出そうにも足が震えて立ち上がる
こともできない。

「助けて……だれか……」

震えた唇から漏れ出す拙い言葉。必死に助けを呼ぶが、答える声
はなかった。

「無駄だ、ここらには人っ子一人居ない居るのは俺らだけだ」

「それに誰が来ても俺が殺してやるよ」

腰に携えた片手剣の刀身が鈍く光る。

もう限界だった。少女の前に突きつけられた絶望という言葉。
一筋の希望も無かった。

どうして……どうして私がこんな目に遭うの……酷いよ。

side 少女

「今日も良い稼ぎになったな」

「そうね。あなた」

少女の両親は行商の仕事をしている。
村から村へ移動して商売をしていた。

今日も辺境の村からの依頼で首都から食料品などの買い付けに行っていた。

「アルミス？」

「あなた静かに、眠ってるわ」

「そうか、随分とはしゃいでいたからな」

愛しい愛娘の寝顔、両親にとってアルミスは何事にも変えがたい大切な宝であった。

妻の膝を枕にすやすやと眠る娘。

「アルミスももう十三か……早いものだな時が経つのは」

「そうですね」

アルミスが生まれた日のこと、初めて歩いた日、初めて名前を呼ばれた日。

嬉しい事、楽しい事、悲しい事、様々な思い出。

色々な事はあるが家族との思い出は両親共に色褪せる事は一日たりとも無かった。

だが、そんな幸せな日々は唐突の終わりを迎えた。

突然のことだった。

数十人の男たちが森の中から現れた。
最近周辺の村で噂になっていた山賊だった。

「あつあなた!？」

「しっかり掴まっっている!!」

急いで此処を離れようと運搬機の亜法動力の回転を目一杯に上げる。

「ちっ！ 逃がすなよ野郎共!!」

山賊たちも逃すものとエアバイクの回転を上げ追撃を始めた。

「お父さん！」

「アルミスしっかり掴まっっている、大丈夫だ心配するな」

「おい！ 積荷を置いていけば命だけは助けてやる」

父にとってそんな甘言に惑わされるつもりもなかった。

周辺の噂によれば積荷を置いても殺された人たちが多く居たことを知っていたからだ。

（こんな奴らに家族は殺させん!!）

亜法動力の回転を過回転ギリギリまで上げ振り切ろうとするが…

…。

「忠告はしたぞ！ 野郎共ヤレ!!」

山賊たちは一斉に亜法銃を構えた。

／亜法銃 〃 小型の亜法動力を組み込んだ銃型の武器。

エナが無いと使えないが、装填などの動作が不要な銃であるため軍でも標準装備になっているモノ。

殺傷能力は極めて高く人体でも容易に打ち抜くことが可能。／

「狙いは運搬車に集中しろ！ 間違っても積荷は撃つなよ。――撃てえ！！」

現れた山賊の半分近く。二十人位からの集中砲火に亜法動力機が耐えられる筈もなく。

ガンッ！！
バチッバチッ！！

金属が弾ける音と共に火花が散り始めた。
もうダメだと家族を連れ、積荷を捨てて森に逃げ込んだがそこに待っていたのは……。

「くっ！！」
「あなた」
「お父さん」

十人位の山賊達だった。後ろも前も逃げ道は残されていなかった。その中から一人の男が声を掛けてくる。

「随分挺子摺らせてくれたな、だがそれもここまでだ」

「――積荷はやるだから家族は見逃してくれないか？」

「ほお、俺たちの狙いが良くわかってるじゃないか。そうだな……」

一か八かの賭けだった。噂通り殺されるなら家族だけでも……小さな希望に掛けてみた。

「……まあいいだろう、お前は見逃してやる。ただし後ろの女二人置いて行くならな」

提案された条件は到底受け入れられるものではなかった。妻と娘を差し出せば一人だけ見逃す。

「なにも殺すつもりは無い。少々働いてもらうだけだ、なにせうちに女が居なくてな皆の相手ができる奴が欲しかった所だなに心配するな、一日五、六十人相手をしてくれれば良いだけの話だ」

「お父さん……」

「心配するな」

泣き顔の娘をなだめるとハッキリと言い切った。

「そんなことはできない!!」
ハッキリとした拒絶。

「そうか……おい野郎共！ 交渉は決裂だ。後は好きにしろ」

「女は殺すなよ」

「了」解」

逃げ出そうにも周りを囲まれ、逃げることはできなかった。

「おっおとうさん!？」

山賊の一人が私の手を掴む。

「娘を放せ!!」

「うるせえんだよ。死ねや!!」

父のに向かつていく剣が……

——私は怖くなって目を瞑ってしまう。
すると聞こえてきた声は……

「あゝあなにやってんだよ、女は殺すなって言ったじゃねえか」
「ワリイ、でもよコイツが庇うからよ……」

女？ お父さんは男の人だよ。

アルミスの眼前には血溜りに倒れ伏した両親の姿があった。

お母さんの背中には一振りの長剣が突き刺さってお父さんの胸まで……。

そこから先。覚えていたのは、掴まれた手を振りほどき森の奥へ走った。

それだけだった。

side out

「なあどつちからやる？」

「こついつのはどうだ？　まずコイツを走らせて先に捕まえたほうがヤルってのは」

「サイコーだぜそれ！」

「おい今すぐ走って逃げな、逃げ切れたら見逃してやる。でも掴まったらなわかつてるな」

「ほれ早く行けよ、始められねえだろ！」

山賊の提案に今は賭けるしかない、そう決めると震える足に力を入れ走り出す。

十三歳のアルミスには森の起伏の激しい道は満足に走ることもできるはずも無く。

「はあはあはあ……はああっ！？」

足をもつれさせ転んでしまっ、しかし山賊達はそんなことはお構いなしにアルミスを追いつめていった。

「はあ……痛ッ」

急いで立ち上がるうとしても足首を捻ったのか思うように走れない。

それでも必死に走り森の奥へ奥へと進んでいく。

「あのガキ何処行きやがった！」

「クソ！」

木々の生い茂る森の中を当ても無くただ必死に走り続けたアルミスの姿を山賊達は見失っていた。

こんな遊びを思いついた山賊達は獲物に逃げられた上に道に迷っていた。

「はあはあっはあゝもう追ってこない？」

自分でも何処まで走ったのか分からなかった。

「ここは？ 遺跡？」

ふと周りを見渡してみる。

木々が生い茂る森を抜け、地面は石畳。

あたりの景色は一変していた。

多分昔の遺跡か何かだろう、こんな目立つ場所に居るのは不味い
と入り口らしき場所から中に入っていた。

薄暗い通路を壁伝いに歩いていく。明かりになるような物も持っ
ていなかったので慎重に一步一步進んでいく。

どうやらかなり古い遺跡のようで所々の柱が倒れていたり床が抜
けているところもあった。

薄暗い通路を抜けるとそこは広間になっていた。

「ここなら休めるかな」

広間には大きな台座があるだけで他には何も無かった。

近くの壁にもたれかかると痛めた足首が痛みを増してきた。

「これからどうしよう」

私の家族は両親の二人だけ、それも今となつては一人きり。
親戚なども一人も居ない……。

「う……え」

涙が止まらない、拭っても拭っても後から後から流れてくる。

「……？ なんだろう」
アルミスに聞こえてきたのは話し声？ 背もたれにしていた壁の
向こうには……。

side 山賊's

「馬鹿か貴様ら！！ 女殺して一人には逃げられただと！？」
「すいません！？」
「まあまあお頭、でお前らが見失ったのはどの辺なんだ？」
お頭を宥めながら地図を取り出してきたのはお頭の右腕的存在、
皆から兄貴と呼ばれる比較的人格者。

「確か俺らの居る遺跡の近くだったからこの辺りです兄貴」
アルミスを追っていた山賊の二人はいつの間にかアジトの近くま
で来ていたらしく。
運搬車から積荷を運んでいた仲間に偶然遭ったのだった。

「なるほどな、しかしこの近くか……」
「兄貴もしかしたらこの遺跡に居たりして」
「ハハッそんな事ねえよ、わざわざアジトまで来る馬鹿はいねえよ」
仲間からの野次に笑い半分に返していく山賊Aすると、

「いや、その可能性もありえる。追っていたのはガキだろうそれな
ら此処が俺らのアジトだと知らない可能性もある」
「じゃあ！？」
「ああすぐに何人かで遺跡の中と外を探せ、居れば良し。仮に居な
くてもまた新しいの捕まえればいいだろう」

兄貴の指示を受け、山賊A＆Bは仲間に声をかけ、捜索隊を編成していった。

「すみませんお頭勝手に指示して……」

「かまわねえよお前の作戦には何時も助けられてるからな」

「いや、俺は頭使うしか能が在りませんから」

「それがすげえんだよ、まあ期待してるぜ」

お頭はそう言い残すと自分の天幕に戻っていった。

「——精々利用させて貰いますよお頭」

一人残された兄貴の言葉は誰にも聞こえる事は無かった。

s i d e o u t

アルミスに聞こえてきたのは山賊達の話し声だった。
どうやらこの遺跡は山賊のアジトになっていたらしい。

「急いで逃げなきゃ」

山賊達が私を探しに来るそう聞いて、恐怖が募る。

「あつつッ！」

此处を離れようと立ち上がろうとすると、足首に激しい痛みが走る。

予想以上に痛めていたらしくまともに走ることは出来そうに無かった。

それでも必死に逃げ出そうと遺跡の通路を歩き出す。

痛みよりも恐怖が勝る、今でも両親の最後の姿が目に残っている。

此処で逃げなきゃ私も酷い目に合わされるそう思うと少しだけチカラが出てくる。

「早く早く」

今遺跡の外に出るのは不味いとさらに奥に進んでいく。
とその時だった。

ガラッ

「きゃああ」

突然足元が崩れていく、古くなった床が私の重みに耐え切れなかった。

その場を離れようにも足を引きずっては思うように動けずアルミスは悲鳴を上げながら地下に落ちていった。

side 山賊A&B

「おい居たか？」

「いやいねえ」

少女を取り逃がした二人の山賊は遺跡の通路を歩いていた。
他の仲間は遺跡の周辺を搜索している。

逃した責任として、危険な遺跡内部の搜索を命令されたのだった。

「でもこんなとこにいるのか？ あのガキ」

「でもよ、兄貴も言ってただろう居てもいなくても良いってよ」

「そうだったな気楽に行くか」

「ああ」

そうして近くの部屋に入ろうとすると「きゃああ」悲鳴が響いた。
山賊達が声の聞こえたほうに駆け出す。

「おいこの辺だよな？」

「ああ……おい！　これみろよ」

山賊Bが指差す場所には大きな穴が開いている。
相当深いのか底の方は明かりを照らしても見えなかった。

「もしかして落ちたのか？」

「もしかしてじゃなくて落ちたんだろ、どうするよ」

「どうするって、とりあえず戻って兄貴に聞いてみるか？」

「そうするか」

兄貴や仲間に報告するためにアジトに向かって駆け出した。

アジトに戻ってみると他の仲間の手掛かりは無かったようで、俺たちが遺跡の中で聞いた悲鳴と声のした場所には大きな穴が開いていたことを報告する。

兄貴は間違いない。そういつと搜索隊に暇そうにしていた奴らを含め三十人近くを引き連れて捕まえて来いと檄を飛ばした。

皆で山賊Aの案内の元穴にロープを垂らし下に降りようとしたその時、穴の底から眩い閃光が迸った。

ほどなく光が収まる。山賊達は武器を構え一人一人慎重に降りていくと山賊達の目の前には少女とその横に……。

side out

「イタタツ」

上から落ちてきたアルミスは何とか無事だった。

腰を打ってはいたがそれほど怪我でもなかった、どうやら床一面にある朽ちた木々のおかげだろう。

うまい具合にクッションになってくれた様だ。

此処はなんだろうと辺りを見回す、しかし薄暗くハッキリとは分からないが祭壇のような物と何かの像があるだけ。

「あれ？ この像どこかで見たことが…… あっ！ 女神像だでもな、んでこんな所に？」

アルミスは、聖機師候補であつたため、来週から聖地学院に通う予定だったので以前に見学に行ったとき聖地の女神像を見ていたのを覚えていた。

聖地で見た物より少し古ぼけてはいるが間違いなく女神像だった。アルミスの疑問に答える声はなく、聞こえてきたのは山賊達の声だった。

「もしかして落ちたのか？」

「もしかしてじゃなくて落ちたんだろ、どうするよ」

「どうするって、とりあえず戻って兄貴に聞いてみるか？」

「そうするか」

どうしよう逃げなきゃ、だが出口と思われる階段は途中で瓦礫に塞がれていた。

明かりもなく暗闇の中山賊への恐怖から腰が抜け座り込んでしまふ。

「うう…… あ、お父さん…お母さん」
泣いても仕方が無いとは分かつてはいるだが、涙はとまらなかった。

そして遂に山賊達の足音が響いてくると

「おいここで間違いないんだな」

「ああ確かにこの穴だ」

そんな声が聞こえると同時に、私が落ちた穴からロープが降ってくる。

もうダメだ。お母さん、お父さん今行くね。
アルミスが覚悟を決めた、その時だった。

辺り一面を閃光が染め上げた。
目を咄嗟に瞑っても眩しさが伝ってくるほどの光。

その時アルミスは神々しい女性を見た気がした。

光が収まると其処には一人の少年が悠然と立っていた。

第十五話 剣士登場 中（前書き）

剣士が出てきた！！

一応三部作予定の二発目！！

第十五話 剣士登場 中

side 剣士

「で、呼ばれてきたんだけど何か用なの？ 鷺羽ちゃん」

「おつやつと来たね、待ちくたびれたよ」

突然天地兄ちゃん家の鷺羽ちゃんの部屋兼研究室に呼び出された剣士。

ちなみにちゃん付けで呼ばないと機嫌が悪くなる、昔それで酷い目にあつた。

「それでまた実験の手伝いですか？ それならもうぜひ帰らせてください」

「まあまあそう言わず、これは剣士殿にしか出来ないんだから」
「……………」

すげえー笑顔で言い切る鷺羽ちゃん。嫌な予感が……いや予感じゃないな確実に不味い方向に向かつてる。

幼い頃から今までに多くのトラウマを鷺羽ちゃんに植え付けられた剣士の勘が告げる。逃げろと。

この自称宇宙一の実験と称した遊びに巻き込まれて無事に済んだ人は俺の記憶には一人も居ない。

天地兄ちゃん曰く、「巻き込まれたらどうすれば良かった？」

「諦めるしかないよ」そう語った天地兄ちゃんの目には涙が溢れていたのは俺は忘れない。

単独銀河最強の天地兄ちゃんをもつてしても、お手上げというある種の最強いや最凶の人物。

そうして崖っぷちに立たされた剣士にこの最強マッドはこんな事

を言い出した。

「と、話の前にお茶でも飲みな」

あいかわらず自由な人だ。ちなみにお茶は指を鳴らせば何処からとも無く出現する非常識振り。

出された物はしかたないと口を付けながら鷺羽ちゃんの方を向くとそこには……。

「飲んだね。すぐに終わるから安心しな、まあ頑張んな剣士……」
満面の笑みの鷺羽ちゃんがいきました。

「あれ？　なんか……眠……く……」

やられた！？　そう思ってもすでに遅く、凄まじい眠気が剣士の体に発生する。

（くそ！　またハメられた！？）

とりあえず一発殴りたいんだが体が動かない。

「さてと、眠った様だけど本当に良いのかい？　かなり大変だと思うけど」

「いえこれも、剣士のためになると信じていますから……」

「でもまあ剣士殿なら大丈夫だろう、玲亜殿の息子だからね」

通信ウィンドウに映っているのは、剣士の母である榎木玲亜であった。

「それに皆さんに可愛がつて貰って良かったですから」

「まっ頼りになるあの子も送ってあるからね」

「それなんですけど、なにも言わずに送っても良かったのですか？」

あの子は玲亜にとっては剣士と同様に我が子のように可愛がつていたので少し申し訳ない気もしていた。

「いいのいいの。瀬戸殿からもお好きにどうぞって言われてるからね。ねっ瀬戸殿」

もう一つウィンドウが展開されるとそこには、銀河連合最大規模の勢力を誇る王政国家 樹雷その裏の最高権力者である神木瀬戸樹雷その人だった。

「あの子にも良い経験になるでしょう、それにそうした方が面白いじゃない」

扇子で口元を隠してはいるが、それはもう爆笑しているのは長い付き合いの玲亜には容易に想像がついた。

こうなったら誰にも止められないことは瀬戸様を知っている人にとつては常識である。

それに下手に止めようとして巻き込まれるのは目に見えているので誰であろうと瀬戸様のお楽しみ中は口出しはしない。

（まあ口出しできるのはあの子くらいね今のところは）

思い出すのは瀬戸様をお説教している姿のあの子の事。

「とりあえず送るよ。いいね」

「はい。……剣士すっかりやるのよ」

鷺羽さんと共に消えていく我が子を見送った。

「しかし瀬戸様、あの子には何も言わなくて良かったのですか？」
「いいのよ。さっきも言っただけど何事も経験よ、あの子には色々な世界を見て欲しいのよ」

玲亜は、そんな母親の顔をしている瀬戸様に驚きを隠せなかった。樹雷いや銀河で『樹雷の鬼姫』の名を知っている者が今の瀬戸様を見たら腰が抜けるような光景だった。

「ふふっ」

思わず噴出してしまう玲亜に瀬戸様はしまったと顔をしかめるがもうバッチリ目撃してしまっていた。

「なにがおかしいのかしら？ 玲亜ちゃん」

「いえ、瀬戸様があの子の事を大事に思っていると、再確認しただけですから他意はありませんよ」

「そっそう、ああ仕事に戻らないとね。じゃあね」

苦しい。自分でも分かっているだろうそんな事を言って通信を切ってしまった。

「素直じゃないですね。心配なら心配と言えば良いのに、トウヤ、剣士……がんばってね」

s i d e o u t

光が収まると其処には一人の少年が悠然と立っていた。

「誰？」

素朴な疑問。光ったら出てきた、意味が分からない。
突然の出来事に驚きを隠せないアルミスだった。

side 剣士

あれ？ どこだろう此処は？ 目を開けると薄暗い場所だった。

—— そうだ！ 確かマッド（鷲羽）に勧められたお茶。あれを飲んでから…… どうしたわけ？

わからない、気が付いたら知らない所。いつも思うんだけどイタズラ（実験）にも限度ってあると思う。

（久々にキレそうだ、とりあえず帰ったら一言文句でも言わなきゃ気がすまない）
混乱していた頭をどうにか整理、マッド（鷲羽）への文句を考えていると……。

「誰？」

突然聞こえてきたのは、女の子の声だった。

剣士の目の前には床の上に座り込んで此方を見つめる女の子がいた。

誰？ と聞かれてもどう答えていいのか分からず、二人の間に嫌な沈黙が……。

「ええーああ、俺の名前は柁木剣士。キミの名前は？」

「あつ私はアルミスって言います」

会話が續かない。再び二人の間に沈黙が流れた。

このままではラチがあかないと剣士が話し掛けようとした時だった。

「おい！ 居たぞ皆降りて来い！！」

大きな声が部屋に反響する。野太い男の声だ。

どうやら剣士は中々厄介な現場に来てしまったようだ。

あつという間に周りをむさい男共に囲まれてしまった。

やはりマッド（鷲羽）が関わるとロクな事にならない。

愚痴を言っても状況は変わらないんだけど、言わずにはいられなかった。

s i d e o u t

「あゝええ、俺の名前は柁木剣士。キミの名前は？」

「あつ私はアルミスって言います」

何を聞いていいのかアルミスは、咄嗟に思いつかず会話が続かない。再び二人の間に沈黙が流れた。

名前はマサキケンシさん。どうしてこんな所に居るのか聞いたほうがいいのかと考えていると

「おい！ 居たぞ皆降りて来い！！」

大きな声が部屋に反響した、ついに見つかった。

「早く逃げてください。あなたまで殺されます！」

関係の無い人を巻き込みたくなかった私は剣士さんに逃げるように言った。

しかし此処には逃げ場など無い唯一の出口は今山賊達が降りてきている穴だけだった。

「やつと見つけたぞ。ガキがもう逃さねえぞ」

「おい今度は逃げ出せないよう、足の一本でも斬っておけよ」

「だな。足が無くてもやる事は変わらねえからな」

「あん？ おい逃げたガキってのは女一人じゃねえのか？」

山賊達の視線が剣士さんに集まる。

私は剣士さんを庇う様に立ち上がり山賊達にこの人は関係ないと言ったのだが山賊達には……。

「関係ねえなら、殺しても構わんだろ」

無駄だった、見逃してくれると淡い期待をしていた自分が情けなくなつた。

こんな人達に両親は殺されたのかと思うと、悔しさがこみ上げてくる。

「……………」

緊迫した状況の中、明確に事情が分からない剣士にとっては俺ピョンチなのか？ と疑問だらけだったのでつい……。

「えつとアルミス、コイツら何なの？」

「はい？ 山賊ですけど」

「山賊？ て事はアルミス襲われてるんだよな？」

山賊とは、また厄介なとこに連れてこられたなとしみじみと感じてくる。

まあ海賊が居れば山賊くらい居るだろうとは思ってはいたけどはじめて見た。

「えっ、はいそうですよ」

つついっ回答てしまふアルミス。どうやら剣士さん状況を余り理解できてなかったようだ。

手短に事情を話す。

「——で、——なんです」

「じゃあご両親は……」

「はい。恐らくですけど……もう」

剣士さんに両親のことを話すと、頬を涙が伝う。

「泣かないでアルミス、大丈夫だからここでじっとしてて」

「あっあの剣士さんっ!？」

剣士はアルミスの涙を指で拭うと山賊達を睨みつけた。

アルミスはどうしていいのかわからず、剣士の言う通りに床に腰を下ろした。

「なんだ？ ガキ俺らとヤロウってのか?!」

「そうだな、簡単に言えばそういうことかな」

剣士の返答が気に食わなかったのか、一人の男が飛び掛ってくる。

「嘗めるんじゃねえ！ ガキが!!」

「あぶないっ!! 剣士さん!!」

男の振り上げた剣が剣士に向かって振り下ろされた。

side 剣士

「なんだ？ ガキ俺らとヤロウってのか？！」

「そうだな、簡単に言えばそういうことだな」

剣士の返答が気に食わなかったのか、一人の男が飛び掛ってくる。

「嘗めるんじゃないやねえ！ ガキが！！」

「あぶないっ！！ 剣士さん！！」

アルミスの悲鳴に似た声が聞こえてくるが、剣士にとってこの程度の剣速は止まっているように感じていた。

（やっぱりか、どうもこの世界は管理外惑星みたいだな）

生体強化もされていない人間の戦闘能力は所詮人間止まり、樹雷闘士や師匠（柁木勝仁） 柁木天地の祖父）の剣速に比べたら止まっているような物だ。

あの人たちは本当に人間か？ そんな疑問は未だに消えない。

（訓練（軽く）とかいって、何度死に掛けた事が……思い出すのは……やめよう。泣けてくる）

side out

「あぶないっ！！ 剣士さん！！」

両親が殺された光景が剣士さんにダブって見えた。

（また、人が死んじゃう）

咄嗟に目を瞑るアルミスに聞こえてきたのは、剣士の声ではなかった。

「ぐぎやあつあ」

男の苦痛に歪む声。恐る恐る目を開けたアルミスの目に飛び込んで光景は、驚愕その一言以外に当てはまる物が無かった。

襲ってきた男が……宙に舞っていた——はあ？？

アルミスに目の前で繰り広げられる光景。

——山賊達が空に打ち上げられていた。

部屋の天井付近まで次々と打ち上げられて逝く山賊達は、生理的に不味い音と共に地面に落ちていく。

時折、苦痛を多大に含んだ呻き声が聞こえてはいたので、死んではいないのだろう。（多分）

side 山賊リーダー&その他

何の冗談だ？ 目の前で繰り広げられている光景は自分の理解の範疇を軽く上限突破。

自分達の半分にも満たない年のガキに良い様に蹂躪されて行く仲間達。

（仲間を呼びにいかねえと）

そう判断を下すと、急ぎアジトに向かって走り出した。

そんなリーダーの考えなど知る由も無い者達

「あのヤロウ!? 逃げやがったぞ」

そんな声が上がれば山賊達の行動は早かった。

まだ無事だった者達は我先にと一斉に部屋から逃げていった。

その後、アジトに駆け込んだリーダーが問答無用でボコられたのは言うまでも無い。

s i d e o u t

（引いたか……、一応加減はしたつもりなんだけど）

床の上で呻き声を上げ続けている男の山、そんな悲痛な声を聞くと少々罪悪感が……。

「アルミス、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。でも剣士さんやり過ぎじゃあ」

「あゝあ、一応手加減はしたつもりなんだけど」

「これですか？」

アルミスの目線の先には死屍累々に横たわる男達の山。

「……うん」

「でも、助かりました。ありがとうございます剣士さん」

「いや、俺も殺すとか言われてたし気にしないで、それと剣士でいいよ。アルミスとはそんなに年も違わないと思うし」

「わかった。それなら一つ聞いても良い？」

剣士が現れてからずっと気になっていた。

「剣士って何処から来たの？ 突然目の前に出てきたんだけど」

アルミスの疑問も尤もだと剣士自身も分かつてはいた。

だがどう言ったら良いのか……。正直に言った方がいいかな。

「その前に、聞きたいんだけど此処ってどこ？」

質問に質問で返されたアルミスと剣士の間に疑問符が飛び交ったのは致しかたなかった。

side 山賊

「なんだとっ！？ じゃなにかテメェら、ガキにやられて尻尾巻いて逃げ出してきたってのか！！」

駆け込んできた、搜索隊のリーダーに怒鳴り散らすお頭。

ガキにやられて尻尾巻いて逃げ出した部下に凄まじい剣幕で怒鳴り散らしていると。

「まあまあ、落ち着いてください、とりあえず話くらいは聞きましょう」

落ち着くように説得するが、余程腹が立ったのか、フンツを鳴らしてと踏ん反りかって椅子に腰掛けた。

（面倒だが、後でフォローでもしておくか）

「では情報の整理からだ、俺の質問に答えられる範囲でいい、女を追っていたら其処にガキが居たって事で良いんだな」

「ああ、間違いねえ。本当に突然現れたんだ、あの部屋には入り口が一つしかなかったから間違いねえ」

（どうやら、嘘は言っていないようだ。しかし突然か……周辺でそんなガキが居たなんて報告は無かったはずだ）

「で、なにか良い案でも浮かんだか？」

「いえ、正直なところ、このまま別の場所に逃げたほうが良いんじゃないかと思ひまして」

「理由は？」

逃げ出すなんて言い出した俺に向かってお頭の鋭い視線が向く。

（ヘタなプライドなど邪魔でしかないものを……面倒だがしかたがない）

「理由は、二つ。本来の目的であった、積荷の奪取は完了している事。もう一つは、此処には少々長居し過ぎました。そろそろ軍などの厄介事が来る可能性が高い事ですな」

（こんなものか……、危険があると匂わせておけば……）

俺が理由を話すと、皆が一様に頷く。

後はお頭の判断を待つだけ、皆も真正面から軍と張り合おうなんて気は更々無い。

楽が出来ればそれで良い、短絡的な思考の者達が山賊には多い事は長い経験から分かつてはいる。

「なるほどな、そういうことなら仕方が無い。よし野郎共引き上げだ
！！」

ここまで自分の思う通りに事が進むと、少し不安になってくる。

「お頭、偵察の奴ら戻ってきました。何時でも出発できます。」

周辺を偵察していた、奴らが戻ってきたら此处にもう用はない。

「よし、一応撤収の連絡を全員に入れておけ。引き上げるぞ」

（しかしガキか……少し嫌な予感がするな）

こうして一抹の不安を抱えながら山賊達は本拠地まで戻っていった。

side out

一応話は聞けたんだが、やはりこの世界は、樹雷の管理区域を外
れている。

（やられた……、こんな所でどうしろってんだよ。あのマッドめ）

side アルミス

「ねえ剣士……」

「どうしたの？ アルミス」

「その……恥ずかしいんだけど」

腕の中で、恥ずかしげに頬を染めているアルミスは、今いわゆる女の子の憧れお姫様抱っこ状態。

「でもアルミス怪我してて歩けないだろ？ やっぱり背中の方が良かった？」

部屋から出ようとした所、アルミスの怪我に気が付いた剣士は、お姫様抱っこか背中に背負うどちらがいいか選んでもらった。

さすがに、問答無用でやるにはかなり抵抗があった。

それにアルミスもお姫様抱っこで良いと言ってくれたはずだが？

「うっ……それは」

（背中がダメ、その胸が……）

剣士にお姫様抱っこか背中に背負うか、どっちが良いか聞かれたときすごく悩んだ。

背中に背負うのはゼツタイにダメな理由があった。

アルミスは、体の発育が特に胸が同年代より大きかった。

（背負われでもしたら、こう……ムニユって——ダメ！ 恥ずかしいすぎる）

アルミス脳内会議

A「ムニユは絶対却下！！」

B「じゃあお姫様抱っこしかないんじゃない？」

A「でも誰かに見られたら……」

B「こんな所に人なんか居ないでしょ」

協議の結果。

「お姫様抱っこでお願いします」

恥ずかしさの余り、顔が真っ赤になっていたのは、自分が一番良
く知っている。

s i d e o u t

「もう少しだと思うから我慢してアルミス」

何時までもあの場所に居るのはマズい、そう考えた剣士はアルミ
スを抱え森の中を駆けていく。

アルミスは此処がどの辺りなのか、必死に逃げてきたため分か
らないらしく。

殆ど勘に頼って森の中を走った。

辺りは夜のためか薄暗く、時折アルミスが震えていた。寒いのか
？ と思いはしたが自分はそれほど寒さを感じない。

（やっぱり女の子に暗い森はツライかな、急がないと）

アルミスが早く安心できるように、少し走る速度を上げた。

く 辺境の村く

今は村長ら村の者達が集まって居た。

「やはり来てませんね」

一人の青年の発言に皆の顔が曇る。

「昨日には着くはずなんだが……」

「やはり何かあったのでしょうか」

最近では山賊の被害が目に見えて増えてきていた。

村では夜間の女子供の外出を禁止しているほどでもあった。

村の物資を届けてくれるはずだった、商人の到着がかなり遅れていた。

何度が依頼をしたこともあったため、なにかあったのではないのかと村の者達で話をしていた。

それに遅れる時は、通信機での連絡があるはずなのにそれもなかった。

これでは何かあったと考えるのが普通だ。

静まり返る部屋に村人が慌てて飛び込んで来たのは、そんな時だった。

「村長！！ 大変だ」

相当焦っているのか、何を言っているのかさっぱり分からない。

「落ち着きなさい、何があつたんだ」

村長が落ち着くように言うのと村人は慌てていた理由を話し始めた。今朝早くに狩りに出かけたなら、狩場から少し離れたところに壊された運搬機の残骸を見つけた。

そして近くの森の中に、血溜りに討ち捨てられた死体を見つけたそうだ

その亡くなっていた人は、何度か村に来ていた事を覚えていたため、急いで知らせに来たのだった。

話を聞くにつれ集まっていた、村人達の顔が強張る。

緊迫するその場を破ったのは、一人の歳若い女性の言葉だった。

「……村長やはり山賊の仕業でしょうか」

その問いに答えるものは居なかった、皆の間に沈黙が流れる。

皆も分かつていた、これは山賊の仕業だろう。

襲われたことも大変だが、運搬する商人が襲われた事の方が重要だった。

このままでは、村に立ち寄る商人が減り、そうなれば山賊らの被害で自給自足もままならないこの村の生活は今より一層厳しいものになる。

「軍への連絡をしよう。これ以上は我々も耐えられない」

皆もなにも言わず、村長の言葉に一樣に頷く。

村長は一人奥の部屋へ、村に常備されている通信端末が置かれている部屋だった。

第十五話 剣士登場 中（後書き）

チヨイ長くなりそうなので次回に続く。

一応次回で剣士登場は終わりでトウヤの方に戻ります。
両者の絡みはもう少しあとの予定。

第十六話 剣士登場 下（前書き）

一応剣士登場の前フリ完了。

あとは本編に織り交ぜて進んで行く筈。

一応おかしい所は無いはずですけど、お気づきの方はご指摘等願います。速攻修正します！！

第十六話 剣士登場 下

暗い森の中に一つの火。

「やっぱり明かりが在ると安心する」

日も落ち、暗い闇に覆われた森を進むのはやめた。

俺一人なら何とかなるけど、アルミスには辛いだろう。

焚き火をしての野宿になってしまったが相当疲れていたんだろう、アルミスは木の根を枕に眠ってしまった。

剣士は結果的に番をすることになった。

（まあ一日くらいなら寝なくても大丈夫）

それに寝込みを襲われる事の方が大変だと、向こうで教わった、いや体に叩き込まれた。主に肉体言語で……。

向こうの夏休みに突然マッドに攫われて、無人惑星（樹雷管理区域）にトウヤ兄と一緒に放り出され、強制サバイバル。

（あれは、ツラかった……トウヤ兄が居なかったら死んでたな）

トウヤ兄つてのは、瀬戸様の息子らしい。らしいつてのは俺は母さんに聞いただけで本人に聞いても、うーん首を傾げてはぐらかす。で、色々事情があるんだろうと幼いながら理解し、それ以来その話題は本人には聞いてない。

また、このトウヤ兄がべらぼうに強い、師匠（勝仁）の弟子で俺の兄弟子に当たるんだけど、未だに勝った事が無い。

しかも「えっ、俺が強い？ そんなこと無いよ。師匠にも未だに勝てないし、樹雷じゃ俺より上の人は結構居るよ」ってさ。

そついやその時からだったな、樹雷は人外魔境なんだと思ったのは……、まあそんな事口に出したら、速攻でボコにされる。

そんな訳で、強制サバイバル（無人惑星編）で無駄に鍛え上げられた、サバイバルのチカラ、こんな所で役に立つとは……。
（少し感謝……普通なら出来るんだけど、多分こんな状況を見越しての訓練だったんだろうな）

割と長い付き合いであるため、なんとなくそう考えてしまう。まあ絶対確定で間違いがあるとすれば「いやあく暇だったもんで……」だろう。

（まあそのサバイバル終了後、トウヤ兄と愚痴を言い合って、ドンチャン騒ぎの飲み会をしたのは良い思い出だ）

——翌朝——

「ううう／＼、ごめんね剣士」

寝苦しそうだったアルミスに膝枕をしていた剣士。
目が覚めたアルミスは顔を真っ赤にして、ごめんを連呼していた。

「辺境・軍駐屯基地（仮）」

「ハッ、了解しました、では」

ふう〜やはり、お偉方との通信は疲れる。毎日なら慣れるだろうがこう突然のモノは未だに、慣れない。

「隊長、今日の任務は一体なんですか、聖機師まで派遣命令出てますけど」

今日この部隊に、派遣されてきたのは聖機人と聖機師、国が誇る主戦力がたかが山賊討伐に繰り出されている。

正直命令を聞いたとき、俺は耳がおかしくなったのかと思ってしまった。

普通ではありえない事、だが上層部、まあ上司から女王直々の配慮であると言われては、なぜとは聞けなかった。

詳細を聞けばなんて事は無かった、任務の詳細ファイルに書かれていた内容を見ればなるほどと納得してしまった。

「これだ……、被害報告のあった村の現状確認と救援物資の輸送及び山賊を発見しだい撃破、なお人質と思われる聖機師候補生の救助を優先」

そう聖機師候補、国の主力である聖機師を動かせる唯一の存在、そうなればこの聖機師の派遣も納得できる。

「近い将来、国のチカラになる聖機師候補だ、この位の出費は安い物だろう」

この任務のために動員された部隊は、百人を超える大隊そこに聖機師が付けば、色々と金が掛かる。

まだ女の聖機師候補であるだけマシだなと思う。仮にこの人質

が男の聖機師候補だったら、軍の全戦力を投入する可能性が大いに高い。

山賊もそんなヘマはしないだろう中には元聖機師である女性が何名か確認されている。そのため奴らも聖機師の男に手を出せば、国が黙っていないことは理解している。

しかも浪人で仕事が無いそんな人が山賊なるそういった事例は少なくない、この事が迂闊に山賊達に手を出せない理由でもあった。お偉方の頭には、討伐することによる利益より目先の損を重要視しているため、今回のように被害が出てからという、後手に回る事しかない。

通常の賊討伐なら我々歩兵の部隊だけでも対処は可能だが、其処に聖機人がいれば話は変わる、人对聖機人ではその差は歴然。

聖機人が確認された任務の難度は数段跳ね上がる、それに被害も軽視できない規模になる可能性もあった。

（まあこればかりは各国や教会が聖機人の管理をしっかりとっていないから、賊に聖機人などが出てくるなんて事態が起こる）

愚痴を言っても仕方が無いことだとは思うが、こればかりは我々歩兵部隊の命に関わることだ。

（口には出さんかな……）

そんな真似したら、軽くて軍から除籍、悪けりや首から上が無くなる。

「隊長？ 難しい顔してどうしたんですか??」

「うん？ そんな顔してたか？」

自分でも気付かないうちに、おかしいことになっていたようだ、
……気を付けよう。

「気にするな、少し考え事をしていた。と……無駄話はここまでだ、
全員に通達これより任務の説明を行う、各自聞き漏らすことの無い
ように、いいなー！」

「ハッ！」「ハッ！」「ハッ！」

見事に統率の取れた部隊、それはこの部隊の教官としても隊長と
しても、心強いそう思えた。

「では――」

だがこの時の俺は、まさかあんな者に出会う事になるとは……思
いもしなかった。

side out

「剣士？ どうしたの」

突然立ち止まった俺にアルミス声が掛かる。

（三人？ いやもう少し居るな）

剣士が感じ取ったのは、足音それも複数。

「アルミス。誰かこっちに向かって来てる」

そういうとアルミスの体が少し震えた、やはり一日程度の時間ではそう簡単に恐怖は消えないだが剣士にもどうしたら良いのか分からなかった。

（まいったな……）

山賊共かそれ以外の……さすがに足音だけでは剣士にも判断できない。

そこで剣士が思いついたのは、トウヤ兄直伝のブービートラップの数々だった。

強制サバイバルの時、狩りに使った罠の数々、トウヤ兄曰く元は対人用のモノらしいので効果は大丈夫なはずだ。

それにその場にある物を使っというのがトウヤ兄の主義、なので見た目が原始的だが汎用性が高い。

「よし、アルミス少し走るよ」

「えっうん」

剣士お手製のトラップを満載にした森、そんなことは露知らず、搜索に来た兵士達。

トラップの餌食になったのは言うまでもない。

side 軍

「三番搜索隊全滅、四番、五番も半壊……」

次々と信じられない報告が相次いで入ってくる。

落とし穴に落ちる奴、ロープで木に吊るされる奴、そのどれもが原始的な罠ではあるがこんな森の中で仕掛けられたら……結果こうなる。

だが軍でもこういった罠の類の対処法は学んでいたはずだが、罠に嵌る者が後を絶えず治療用の天幕が満杯になっている。

（どうなっている……相手はただの賊ではないのか？）

今までも山賊の討伐任務に出かけてもこのように罠を張られたことなど無かった。

（しかも、大半の者が気が付けばやられていた……）

ありえない、搜索には五人一組で周辺警戒をし易いようにもしていた。

だが、罠を事前に発見することも仕掛けた者の確認も出来ていない。

なにか対策を考えないと、思案していた時だった。

「隊長！！ 一番搜索隊より報告、賊と思しき男一人と救助対象の女の子を発見したと」

「そうかつ！ 顔の確認は」

「はっ！ 渡された資料の写真で確認しましたので聖機師候補の女の子に間違いありません」

当然来た報告は、救助者の発見という吉報だったが、賊が一人一緒にいるのは不味いな。

（盾にでもされては、此方は手出しがでкин）

「では、至急全搜索隊に通達しろ！ それと全員に手出しは控えるよう厳命しておけ」

（これで、賊が自暴自棄にならん事を祈るしかない）

女の子が殺されては、任務の失敗、任務の最優先は女の子確保であるからだ。

（全く、嫌な世の中だ）

s i d e o u t

「まずいな」

「どうしたの剣士」

アルミスの不安そうな声を上げるが、剣士はどうすべきか判断の付かない状況のせいで気が付いてなかった。

（どうする、このまま森を進むべきか。いや相手の数が多いから無理か……やっぱりこれが一番か）

「剣士「アルミス」ん？ 何？」

剣士が考えた一番だと思う方法。

恐らくアルミスは嫌がるだろうけど、これが最良の案だと伝える。

「俺が囹になる。隙に逃げてくれないか」

「そ、そんな、そんな事できないよ、私が巻き込んだのに」

やっぱりというか、こうなるだろうとは思ったが、やっぱりアルミスは優しい子だなそう思えた。

だったら尚更、この子だけでも助けないとそう改めて思う。

それにトウヤ兄と魍呼姉に昔言われた事を思い出す。

「剣士、チカラってのは守るためにある、だから守りたいものを守れ。それだけのチカラはお前は持っているはずだ」

師匠との修行の時に言われたことだ。

「剣士、守るのにチカラを使うなら躊躇うな。そして後悔するな、それだけは覚えとけよ」

昔色々あった魍呼姉の言葉、主に肉体言語で叩き込まれたせいでよく覚えてる。

俺はこの子を守りたいし助けたい。

そう思えばチカラが沸いてくる。

（修行してくれた皆には感謝だな、こんな事を見越しての事かは分からないけど）

「大丈夫だよアルミス、すぐ終わらせて迎えに行くから……」

「絶対だよ。絶対だからね」

「わかった約束」

アルミスを見送った剣士は、色々と準備を始めた。
出来る限り死なない程度のトラップ、死にはしないがこれは痛い
だろうな。

仕掛けてる本人が哀れに思うほど、剣士お手製トラップは凶悪度を増していった。

「——という訳です」

「なるほどねえ、異世界人という事でいいのかしら剣士ちゃん」

「そうなりますね、ここは俺の居た世界ではない事は確かですから」

「そう……」

「ここがどこかって？ 俺もびっくりこの国の女王様の執務室。」

なぜここに居るかつて？

いや実は――

「隊長！ 二番隊三名が負傷、六番隊全滅です」

「一体相手は何人居るんだ、一人じゃないのか！」

「ハイ相手は確認出来る限り、少年が一人です」

「待て、そいつは本当に山賊なのか？ こんな凶悪な畏、見たこと無いぞ」

俺の元に届いてくる相変わらずの報告に指揮官達は右往左往の大混乱。

突然やって来た、無能を絵に描いたような指揮官共は、現場を混乱させるだけで使いようが無い。

（全く何処の馬鹿だ、こんな奴らを送ってきたのは……）

まあ手柄欲しさにどこぞの馬鹿貴族様を送ってきたんだろうと思う、自己顕示欲の強い奴が貴族には多い。

（こんな奴ら送るだけ無駄な気がするが、そんな事にも気が付いてないのか……）

このままでは、軍の被害が増える一方だ。

「全部隊に通達、進軍をやめるように伝える！」

（初めからこうすれば良かったんじゃないかと思う）

「聞こえるか山賊！ 今すぐ人質の女の子を引き渡せ、我々の目的はその子の保護だ」

拡声器から飛び出す、隊長の怒声に森は静まり返った。

その時だった、突然物音がしたと思ったら目の前に少年が降ってきた。

当然現れたことに、皆が警戒を強める中、隊長が一步前に踏み出す。

「どうだろうか、女の子を引き渡してくれば我々はすぐに下がるが……」

緊張が周囲に伝わる、得体の知れない少年への警戒が強まる。

「あの、もしかして助けに来てくれたんですか？」

「はあ？？」

で色々と話し合つと、俺の勘違いだった。

どうやらこの少年は我々を山賊だと思っていたらしく、人質にな
っていた女の子は無事だそうだ。

（勘違い……どう報告すればいいんだこんな間抜けな事）
上層部に通信をつなぎながら、新たな悩みが重くのしかかった。

「じゃあ私達の勘違いだったの」

「うんそうみたいだね、それで話を聞きたいから城まで来て欲しい
んだって」

こんな事があった。

（まずったなあ、助けが来るなんて考えもしなかった）

「で、終わったことは良いとしてこれからどうするのかしら」
目の前に居るのは、この国の女王フローラ・ナナダン、どこか瀬
戸様に似た雰囲気的女性だ。

これからの事って言われてもなあ。

「これからと言われても、どうしたらいいんですかってのが本音です
ね、そもそもこの世界のことよく分かりませんし」

そう知り合いも居る訳でもなく、家とか帰る場所すらない状態。

「なら少しやって欲しい事があるんだけど……」

この時俺は気付くべきだった、フローラ様のいやゝな笑みに……。

第十六話 剣士登場 下（後書き）

とりあえず次回よりトウヤのお話に戻ります。

剣士がどうなったかは、もう少し後の予定です。

第十七話（前書き）

遅くなりました事、大変申し訳ない。

前回の更新で溜めていたネタ放出してしまい、若干スランプ気味でした。

今後の更新は、ストック分がある程度溜まってからと考えていますので七月頃になると思います。作者の筆が早ければもう少し早めに出せると思いますが、あくまでも予定なので期待しないで下さい。

*誤字、脱字や話のおかしな点など、気付いた事があれば遠慮せずにお願ひします。

言われないと気付かない事もあると思いますんで。

では、第十七話お楽しみあれ！

第十七話

「トウヤ……起きろ」

ユサユサ、体が揺れる。

薄っすらと目を開けると、目の前には褐色肌の美人が……アウラだった。

「おはよう……アウラ」

「やっと起きたか、しかし昨夜は済まなかったな」

「気にしないで良いよ、俺も少しハメを外し過ぎたし」

そうかと少し安堵したような声を上げるアウラ。

ちなみにシュリフォン王は現在、二日酔いでダウンしているらしく、見送りには来れないとの事だった。

（そついや、かなり飲んでいたような気が……、ダメだ覚えてないや）

「軽い食事を用意しておいた、それと食事の後学院まで送ろう」

今日行われる儀式は午後からなので、少しゆっくり出来る。

アウラの案内で昨夜宴会をした部屋へ。

朝食はアッサリしたメニューだったのは助かった。

（二日酔いには、良いお味です）

「……では、そろそろ行こうかあまり遅くなると不味かるう」

「あっはい」

帰宅か……、ああ、絶対怒ってるよな……不安スギル。

不安ではあるが帰らない訳にはいかない。

<トウヤ頑張れ>

蒼火の励ましの言葉に俺の涙腺は崩壊寸前だ。
心の準備に手間取ったが、いよいよ帰宅の時間になった。

「では、またいつか」

「ああまた遊びにくるよ。学院でも会うかもしれないけどね」

アウラの案内で森の出口まで送ってもらう、この道を進めばラシヤ様の寮に行けるそうだ。

一本道らしいので迷う事はない筈だ。（多分）

side ラシヤラ

（ええ〜い遅い！ 彼奴は何をしておるんじゃ）

イライラしているラシヤラ様、朝から落ち着き無く部屋を歩き回っている。

なんでそんな事になっているのかというと、従者であるトウヤが帰ってこない。

昨日シュリフォンからの連絡で今日帰ってくるとの連絡を受けて待っているのだが、帰ってこない。

「彼奴め！ 我の従者としての自覚が足りぬ！！」

帰ってきたらお説教じゃ！ そう言いつつ自分の執務室へ。

現在執務室内では、キャИАとワウが儀式の為の準備を進めている。

「どうじゃ二人とも、着替えは済んだか？」

執務室の中には、儀式用の礼服である。

レオタードと呼ばれる昔からの伝統衣装に身を包んだキャイアとワウがいた。

「では最後はこちらを」

マーヤが二人に手渡したのは、肉球ハンド（ぬこ仕様）と呼ばれる、ステッキである。

これも昔からの伝統的な物で、儀式参加者は必ず持っていないければならない重要な物である。

「ありがとうございます、マーヤさん」

「ありがと、エリア」

ワウも準備を終え、かなり上機嫌な様子だ。

「そういえばあのバカはまだなんですか？」

「そういや、今日はまだ見かけてない様な気が……」

（（あつ））

二人の何気ない一言がラシャラの耳に聞こえる。

「あの馬鹿者はまだ帰っておらん！ ええい帰ったら説教してくれるわー！」

（（地雷だったか……））

side out

それほど怒っているとは露知らずのトウヤは、森の道をブラブラと歩いていた。

「良い天気だな、空気もうまいし」

天候も暑すぎず寒すぎず、穏やかな風が頬を撫でる。
今の季節が一番過ごし易いんじゃないかと常々思う。

「のどかだ…実に癒される…」

最近なんかゆっくり出来る時間も無かった所為か、スゴく癒される。

なんとなくだが、地球の雰囲気似ている所為もあるかな。

（地球か…天地に剣士は元気にしてるかな）

天地は、俺の師匠柁木勝仁の孫で兄弟子、そんで俺の親友だ。
で剣士は俺の弟子で、中々の使い手でよく試合などする仲だ。

（ハッキリ言えば才能の塊みたいな奴、俺でも才能的に言えば剣士には勝てない。

だが兄弟子としては負ける訳にはいかないんで、模擬戦は今の所
負け無しだ）

まあ二人とも、樹雷関係者なので樹雷女性関連の問題を多大に抱える、同胞、いや被害者である。

（天地と仲良くなったのって、瀬戸様の愚痴聞いて貰った時からだったな…）

などと懐かしい事を思い出していると、

<ねえトウヤ、あれ……>

<どうした？ 蒼火>

蒼火がなにか見つけたようだが……。

何かあるのか、周囲を見渡す。

（あっあれか？）

トウヤが見つけたのは、一人の女の子だった。
何をしてるんだ？ 谷なんか覗き込んで…。

<声掛けてあげたらトウヤ>

言われずとも、困っている人は助けないとな。

「どうかしたのか？」

side ???

どうしよう……、お母さんから貰ったハンカチが…。

「どうかしたのか？」

「えっ？」

誰？ 突然声を掛けられ振り向くと、どこかで見た事のある男の子がいた。

side out

良かれと思い声を掛けたんだけど、一步バックステップ……なぜ…。
なんとか話を聞けたんだが、どうも大事なハンカチを谷の方へ落としてしまったらしい。

「取りに行きたくても、あの辺りは喫水外で飛空機も使えないんです…」

肩を震わせ、泣き出してしまった。

なんでもあのハンカチは、母親からの贈り物でとても大事にしていたらしい。

（母親か…）

それほど大事な物なら諦めるなんて言える訳ない。
なら俺に出来る事は一つだけだ。

「——よし！ 少し待ってろ」

そして、俺は……——飛んだ。

「あっ!？」

ロッククライミングの要領で、下へ下へと降りていく。
途中に在った太い木の根を伝い、ハンカチに手を伸ばす。

（あと少し……ん——よしとッ）

掴んだハンカチをポケットに突っ込み、上に戻る。

幸い、こういった運動？ には慣れていたの所為もあってか割に
楽な作業だった。

（こんな所で、サバイバル訓練が活かせるとは……さすがとしか言えないな…）

「っと！ はいこれで良かったよね？」

少し汚れてしまっているが洗えば大丈夫な程度だった。

「ああのっ、ありがとうございましたっ」

カクンカクンと、頭を下げられると少々気恥ずかしい気分になってくる。

「いいよ、気にしないで」

「でも……」

<トウヤ、そろそろ帰らないとマズいんじゃない？>

そういえば、時間…ヤバい！？

「じゃあ俺はこの辺で、じゃあね」

「あっ」

トウヤは急いで寮に向かい走り出した、何て言い訳をしようか考えながら……。

side ????

「あっ」

行ってしまった、確かあの人はラシヤラ様の従者だったと思う。ならまた会えるかも…、ふとそんな事を考えていた。

「ラピス！」

「あつりチア様」

ラピス・ラーズ。それが私の名前…名乗るタイミングを逃してしまったけど次こそは…。

「ラピス？ どうしたの」

「あつ実は……」

リチャ・ポ・チーナ。それが私の仕える方の名前、そして私の姉のような方。

「そうラシヤラさんの従者に……、ではまた会う事もあるでしょう。その時に私からも礼をしましょう」

「はい、リチャ様」

side out

「ハアゝ入りづらい」

寮の玄関先近くまで来たは良いが、言い訳が思い付かなかった。

（ここはいつその事正直に……いや駄目だな）

途轍もなく気不味い、まさかこんなに遅くなるなんて。

少々どころではなく、かなり寄り道し過ぎた。

<トウヤ頑張れ>

もう正直に話そう、そう決意し扉を開けた。

「ただいま戻りました」遅いわ！ 戯け！！」「ゴメンなさい！？」

ラシヤラ様のお説教は続く、言い訳無用で怒られる。

悪いのは完全に俺だから言い返す言葉もない。

「で一体今まで何をしていたんじゃ」

「それはその……」

もう正直に話そう、そう思い話してしまった。

「なるほどな、ダラダラ散歩してたら、困ってる人を助けていたら遅くなったと」

「はい、仰る通りです」

「良い事ではないか！！　なぜもっと早く言わんのじゃ！」

八つ当たり気味なお説教は、儀式の時間が近くなったので、強制的に終了した。

（助かった）

……

……

……

だが、「それは、なんだ？」

ラシヤラ様のお話を終えた俺の目の前にはキャイアとワウがいるんだが……

（えっ俺がオカシイのか？　いやでもこれは……）

トウヤは、正直今ほどここが異世界なんだなと思ったことはない。

「なんでレオタードが正装なんだ？」

いや、レオタードが正装って……、しかもなんか猫の手みたいなステッキまである。

俺がオカシイのか、トウヤの常識が軽く崩壊した。

（まさかこれも異世界人の影響か？　いや絶対そうだろうなそれしか考えられない）

ホントここに来た異世界人、碌な事しない。

正装にレオタードって、発想がまず正気を疑う。

（多分面白半分に広めたら、こんなに馴染んでしまったんだろう）

そう考えるとこの世界の人達ももう少し疑問を持てよと、僅かながらに思う。

「あんた、頭抱えてどうしたのよ」

「なあゝにトウヤ、もしかして見とれてたとか？」

「いや、何でもないから気にしないで」

（この世界での正装なんだ、気にしたらダメだ）

――儀式場（闘技場）――

儀式は各国の皇族や学院の職員達、それに男性聖機師が出席し程良い緊張感に包まれていた。

儀式は順調に進みだし、続々と今年の聖機師授与生達が会場の中央に設置された舞台に集まってくる。

（百人弱位かな、結構大掛かりで驚いたな）

「これより聖機師称号授与式を執り行います」

全員が舞台に集まると、学院長のお話が始まった。

「キャイア・フラン。前へ」

「はい！」

一番に名を呼ばれたキャイアは、学院長の前に片膝をつくと聖機師の証である。

アレが贈られる。

「ラシヤラ様……アレってもしかしくなくても」

「うん？ ああアレはネコミミと呼ばれる聖機師の証じゃ」

「ああ……そうですか……」

（聖機師の証がネコミミって……）

正装のレオタード以上の衝撃的な光景にトウヤはこれ以上何も言えなかった。

キヤイアがネコミミを付けて、猫ステッキを掲げると、儀式場は歓声に包まれた。

（これは、まんまミスコンだな）

ますますココが異世界なんだな、そう思えてならないトウヤだった。

そうして、順調に儀式は終盤を迎え、続々と儀式場から聖機師となった者達が出ていき儀式は無事終わった。

「「ラシヤラ様」」

「うむ、キヤイアそれにワウおめでとぅ。今日より正式に我が従者と認めよう、しっかり頼むぞ」

「「はい！」」

こうしてキヤイア&ワウは正式にラシヤラ様の従者となった。

「二人ともおめでと」

「ありがとぅ」

「ありがとウヤ」

そんな時だった。

「すみません」

後ろを振り向くとメガネを掛けた女の子が、その後ろに立っていたのは、見覚えのある女の子だった。

「あれ？ 君は確か」

見覚えのある女の子は、ゆっくりと声をあげる。

「あつあの先程は、ありがとうございました」

「先程、この子を助けてくれたそうで、私からもお礼を言いわせてもらっわ、ありがとう」

「そんな気にしないで下さい。それに困っているならお互い様って事で」

お礼をされる程の事などしたつもりはなかったんだが、こう改まって礼を言われると気恥ずかしくなるトウヤだった。

「トウヤ、お主知り合いだったのか？」

イマイチ話の内容が理解できなかったラシヤラ様がそんな事を言ってきた。

「あゝ彼女の方は、先程話した女の子ですよ」

助けた女の子ラピスに手を向け説明すると。

「おおなるほどな彼女の事だったのか」

「ええとても助かったは、如月トウヤさん」

メガネの女の子に名を呼ばれ。

「あれ？ 俺名乗りましたっけ？」

「いえ、先程アウラと話していたらアナタの事を聞きました、もし

やと」

「アウラからですか、なるほどそれならその如月トウヤで間違いないですね。ええ」と

「失礼、名乗っていませんでしたね。私はこの学院で生徒会長をしています、リチア・ポ・チーナ」

「あ、ラピス・ラースです。リチア様の従者をしています」

リチアさんは、キツそうだがなんか優しそうな雰囲気的女性だった。

それに生徒会長という事はかなり優秀な人なんだろう。
(まあ見た目通りな気もするが)

「では、また学院で会う事もあるでしょう。失礼します、ラピス行きますよ」

「はい、トウヤさん失礼しますね」

「ええまた学院で、今度から気を付けてね」

「はい！」

二人に別れを告げ、一息ついていたトウヤ。

—— そんなトウヤの様子を伺う一人の男が居た。

side ユライト

「彼がそうですか……、何も起きないと良いんですけど」

「ダグマイアの事かしら心配は？」

「ふふそうかもしれませんがね」

ユライト・メスト、宰相ババルンの弟でダグマイアの叔父に当た

る人物。

現在、聖地での教職の傍らダグマイアの監視をしている。
学院では、その優しい風貌も相まって女生徒から高い人気を誇る。

トウヤが学院で警戒している人物でもあった。

「ゴホツゴホツ」

「そろそろ戻った方がよい」

「そうですね、ですがやはりもう時間は、残されていないようですね」

いつもの発作、ゆっくりと息を吐き、痛みを耐え切る。

ようやく動けるくらいに収まると、騒ぎになる前に自室へ戻ろうと、歩き出した。

（もう少しなんです、頼みますよ）

自身の胸に手を当て祈るように、呟く声を聞いたものは一人を除いて居なかった。

（本当に無茶をする、だがお前と私は、一心同体。必ずや成し遂げてみせる）

side out

<——トウヤ>

<ああどうやら、様子見だけらしいな>

リチアさん達と話している時、ずっと見られていた。

気は付いていたが、あえて放置して置いたが、どうも今接触する気は無いようだ。

<ユライト・メストか……、なんか予想と違うな>

最初はユライトだとは、思いもしなかった。

近くに居た女生徒がそう呼んでいたから分かったが、まさかあんな優男だとは……。

それに、

<病気か…>

トウヤには、かなり症状のキツイ病気に掛かっているように見えた。

<あの人なにか普通じゃないよ>

<普通じゃないって？>

<よく分かんないけど、なにかおかしい感じがする>

蒼火の真剣な声に俺は疑う事をやめた。

こういう時、蒼火の意見で間違った試しが無いのは事実だった。それに警戒しておく事に不満はない。

ババルンの弟。これだけで警戒するには十分な理由になる。

<さてと、これから忙しくなりそうだ>

<楽しそうだねトウヤ>

明日からの学院、宰相ババルン、ダグマイア、ユライト。

懸念事項は絶える事は無い。

「ああ、これから楽しくなりそうだ」

トウヤの覚悟、これから起こる事象人知れずにトウヤの顔に笑が溢れる。

<無茶しないでねトウヤ>

蒼火の忠告がトウヤに届いたかどうかは、蒼火には分からなかった。

第十七話（後書き）

感想 or 指摘等々、随時募集中です♪

第十八話（前書き）

多分大丈夫なはず、見直ししたしハズなのに不安アリアリの作者ですw

おかしかったら指摘メッセージ下さい。

ではどうぞです。

第十八話

side ダグマイア

俺は…間違つてなどいない。

なのになぜだ、なぜ俺がこんな目に遭わないといけない。

「ダグマイア様……」

「なんだエメラ」

エメラ、昔から俺の補佐をしてきている従者だ。

「無様な俺がおかしいか？」

従者のモノ言いたげな視線に苛立をあらわにしてしまう。

「つすまない。少し一人にしてくれ…」

八つ当たりに近い言葉を吐き出して、少しばかり後悔の念が胸をよぎる。

「ダグマイア様……、判りました。何かあればすぐにお知らせください」

「ああ」

俺は、逃げるように自室へ。

情けない。従者に心配を掛けるような主など不甲斐ないにも程がある。

だが、そんな考えも如月トウヤ。アイツを思うとすぐに苛立へと変わる。

「必ずだ…必ず、俺を裏切ったことを後悔させてやる」

そう決意を新たに、今後の計画を練る。
必ずや、成し遂げ父上にも認めさせて見せる。
(俺は、こんな所で終わるつもりはない！)

side out

朝日が昇り、鳥のさえずりが聞こえてくる。
爽快で穏やかな風が頬を撫でる。

「くうく 良い天気だな、やっぱり散歩に出て正解だ」
ぐうと背筋を伸ばす。

今朝は早くから、近くの森へ散歩に来ていた。
今日からの学院など、楽しみが多くて目が覚めてしまった所為だ。

「やっぱり自然は良いな、なんていうか落ち着く？」

<それはいいけどトウヤ、そろそろ戻らないと皆起きてくるよ>

「ん？ もうそんな時間か、残念だけど戻るか」
来た道を戻ろうと、踵きびすを返すトウヤだったが、ふと立ち止まり口を開いた。

「と、なあそろそろ帰るんだが出てきたらどうだ？」

右手に見える、大木に向かいトウヤが話しかけた。
すると、ガサガサと木の葉と枝が揺れ、何かがトウヤの背後に降り立った。

「何時から気付いていたのかしら？」

仮面を付けた女ネイザイは、疑問の声を投げかける。

「何時からって、最初から？ 具体的には、朝屋敷を出た時からかな」

気配の消し方は上手い方だが、この程度で俺（主に蒼火）は誤魔化せない。

「最初から……ふふ、やはり油断ならない人みたいね」

仮面を付けたままなので、笑い声が聞こえても笑っているのかよく分からない。

だが、いまずぐ襲ってくる気は無いようだった。

「やつぱり様子見か？ いや何か用でもあったか？」

トウヤの言葉を聞くと、仮面の女の空気が変わった。

（言葉が悪かったか…）

「ええ今日は様子見。用と言っても特に無いわ、ただアナタと話せて良かったとは思っただけだね」

「はは、話くらいで大袈裟だね。話くらいならいつでも来てくれていいよ。それと今度会う時は、その無骨な仮面なしで頼みたいけどね」

「ふふ、考えておくわ。じゃあまた会いましょうトウヤ君」

「期待しないで待ってるよ、ええ」と「ネイザイよ」了解、ネイザイ」

仮面の女は、そのまま森の奥へと消えていった。

（今度会う時が敵で無い事を祈ってるよ）

そんな事を思いつつ、屋敷に戻る道を歩き出した。

< ねえ、トウヤあの人逃がして良かったの？ 敵になるかもしれないのに… >

< いいんだよ蒼火。殺すのなら何時でもヤレる… けどあの人は、敵でも無く味方でも無いそんな感じだった、様子見って事は恐らく誰かに依頼でもされたんだろう >

そう考えると、ここで殺せば知らぬ所に敵を作る事になる可能性があった。

なら、このまま放置して置けば何時か向こうから出向いてくるだろうとトウヤは考えていた。

困いやこの場合は餌って感じかな、後はどんなのが食い付いてくるか… 少し楽しみが増えたトウヤだった。

s i d e ネイザイ・ワン

まさか気付かれているとは、思いもしなかった。

どうやら、今後の監視プランを修正しないとイケない。

「でも割に平然としていたのは、不気味だったわね」

（気付いてても何もしなかったという事は、………… いや、考えても仕方ない）

憶測でしか無い判断は、時として非常に危ういモノというのは、仕事柄よく理解していた。

だがやはりというのかしら油断できない、実際に話してみるとそれがよく分かった。

「これは、ダグマイアには荷が重いかもしれないわね」
このネイザイの不安は、当たらずも遠からずといった所。

「でも私たちの計画の障害にはならないだろう、こちらから手を出さなければけど…」

意味深な呟きを残し森の奥へとネイザイは、姿を消した。

side out

ところ変わって、ラシヤラ寮の食堂

（朝食）

（うまいうまい。流石は、エリアって所だな）

朝食の席に並ぶ数々の料理。

ああ見えてエリアは、このスワンの料理長をしていて、ここに並んでいる料理は全てエリアのお手製。

どれを取っても、お店を出せるくらい素晴らしい出来。

（やっぱり何度食べてもうまいな。腕前的には、砂沙美ちゃんクラスだろうか）

柁木砂沙美樹雷。天地の大叔母にあたる人なのだが、見た目が十代の少女である。（おばさんなんて言ったらどうなる事か…）

料理というより家事全般の腕は、達人との呼び声も高く。幼い見た目とは裏腹にしっかりしてる。

あと俺と剣士の家事技能の師匠でもある。

（にしても厳しかったな、こと家事に関しては……）

目頭を押さえると、少し濡れていたのは見なかったことにしてくれ…。

思い出し泣き、語呂は悪いがこれ以外に思い当たる言葉はなかった。

……

……

……

「そうじゃトウヤ、今日から学院での仕事じゃろ大丈夫か？」

「そうですね、初めての場所なので不安はありますが何とかしますよ」

「まあ他にも、働いている人もいるし大丈夫でしょ」

「そうそう、キャイアの言う通りだよ。それに職人の知り合いに色々話したから大丈夫だって」

「そっか、ありがとワウ」

「いいのいいの、決闘騒ぎの時助けてもらったお礼だから気にしないで」

朝食の席で楽しげに談笑に花を咲かせる。

本来従者と主と一緒に食事するなど、余り無い事なのだが。

昔から一緒に食べていたらしく、キャイアも自然と席に加わっている。

ワウに至っては、元々そんな事気にも止めていない。が、マーマさんはそれは出来ませんと食事中部屋にも余り出入しない。

先王の時から、シトレイユに仕えていた彼女には、きっぱり断られてしまったそうだ。

曰く、「従者が主と食を共にするなど、私には出来ません」だそう
うだ。

まあ自分が同席しない代わりにと、俺ら三人が席につくの黙認
してくれている。

今日から学院へ行くのは、ラシヤ様、キャイア、ワウ、エリア、
そして俺だ。

キャイアとワウは、今日から聖機師として働かなくては、いけな
いのだが最初の難関である。

就職は、すでに決まっているので少しばかり余裕である。

（まあ決闘の申し込みは、あるから気は抜けないんだけどな）

「では、行つて参るぞ」

「はい、いつてらっしゃいませ」

「では、俺もそろそろいつてきます」

「そうですね、今位からなら丁度いいでしょう。そうそう今日は、
先日案内した物資搬入港の方まで来て欲しいそうなのですが道は、
覚えていますか？」

「大丈夫ですよ、昨日の今日ですから、ではいつてきます」

トウヤは、迷うこと無く、素早く、港に向かって走っていった。

s i d e ジョジョイ

私は、ここ聖地学院で生活関連の管理をしている管理職員、この
後新人の人が来るとハンナから聞いたのだが。

それがまた、若い男―いや少年と言ってもいい位の年齢だと聞かされて、新人の嬉しさよりも、不安が増さってしまった。

（ホントに大丈夫なのかしら、不安だわ…）

そう思いつつも、ハンナと学院長が認めたのならと多少の期待をしていた。

（せめて、足手纏いにだけならなければ……）

なんて思っていたのが馬鹿らしくなるわね、これは……。

「ジョジイさん、一階の部屋終わりましたよ」

「えっもう、終わったの？」

「ええやっぱり初めてなもので少し時間が掛かってしまいましたけどなんとか一応確認の方お願いできますか？」

私でも同じ量を終わらせるには、余りにも短い時間。

最初は、どっか手抜きでもしているんじゃないかと疑いもしたが、確認すればするほど完璧この言葉が相応しい程に出来ていた。

正直私でもここまでするには、時間的にかなりの無理が出てくる。

「……………やった、この子当たりかも」

叫びたい気持ちを抑えて胸の内で小さくガッツポーズ。

そんな私の様子を見てどこか間違いでもあったのかと不安げなトウヤ君。

「大丈夫これ以上無いくらい完璧」

長く学院に務めているが、新人の子がここまで出来る事に驚きと嬉しさに満面の笑みでOKサインを出した。

自分がした仕事でここまで褒められたのに驚いたのか、目を丸くしているトウヤ君（うっかわいいわねこの子……年下も有りかしら……）

side out

「大丈夫これ以上無いくらい完璧」

こんなに褒められると思わず自然と笑みが零れてきた。

こっちに来てからまともに家事などしていなかったから少し不安もあつたが問題なかったみたいで安心した。

それに忘れてはいけなのがココは、異世界だという事向こうで普通なことでもコチラではどうかなど俺に判断なんてつく筈もない。そんな心配もあつたが今の所大丈夫だった、師匠（砂沙美）に感謝。

しかし、やはりというのか俺が暮らしていた場所樹雷とかなり文明的に差がある。

まず向こうでは掃除などの家事や育児に至ることまでも全自動のロボット任せな所がある。（例外もあるが）

一般的な樹雷の人達からしたらほぼ手動、自動などの字も見当たらないなどはつきり言つて初期文明の星の生活環境など向こうの世界では考えられない。

そんな事、趣味でやるかTVドラマに出てくるようなモノって認識が結構強かったりする。

「じゃあトウヤ君、次の仕事なんだけど……」

なぜか頬の紅いジョジイさんから仕事の説明を受けながらトウヤは、改めて頑張るそんな気持ちになった。

side マリア&ユキネ

今日は、記念すべきというのでしょうか私の学院生活の始まりの
はずでした。

でもさあ行きましようと護衛のユキネを連れ寮を出ようとした時
でした。

突然屋敷のメイドが本国のお母様から通信が入っています、なん
でも緊急を要する事なので急いで来るようにとの事らしい。

こんな朝から何の用でしょう、お母様の性格をよく知っている人
なら絶対に禄ろくでも無い事に巻き込まれるそう直感で感じるはず
だ。

出ない訳にも行かない、出たら出たで出なかったら出なかったで
どちらにしても禄な事じゃない。

でも知らずの面倒より知つての面倒の方がまだ被害を抑えられる
筈、何時の頃からかお母様の話は何時如何なる時でも聞き逃したり
しないよう心掛けている。

今日は、一体何をしてくれるのかしらお母様ったら……、不安九
割希望が一割で恐る恐る自室の通信機のスイッチを入れた。

やっぱりやめておけば良かったとすぐに後悔するハメになるとは、
流石の私でも予想できなかった。

お母様が開口一番にこんな事を言い出したのだった。

「マリアちゃん、結婚してみない？」

かわいく言ったつもりだろうお母様の発言に私は、思考が停止す
る感覚を初めて感じた。

ユキネに至つては、なぜか”結婚”のフレーズを聞いて顔を真っ
赤にして気絶した。（何を考えたの…ユキネ）

ようやく思考停止状態から元に戻った私は、声を張り上げた。

「おっお母様！ 突然なんですか！？」

「あら、でも結婚って言ってもすぐにといい訳でもないのよ、あくまで今は”婚約”って意味よ？」

「お母様”婚約”と”結婚”普通なら違いますけど私は、次期女王なんですよ」

「そう一般的な”婚約”と”結婚”なら意味合いは、だが王族となれば別の意味になる。」

王族と婚約する＝結婚になる。

それは、国内の貴族達が挙^こつて狙う地位である。

私と婚約＝結婚すれば王の次に権威のある地位に親族を入れる事ができる。

そう王家の血筋が手に入りうまく行けば次期王族に名を連ねる事が出来る事を意味する。

「もうそんな事位分かってるわよ」

「でしたら、色々と問題がでるんじゃない——」

「そう私の夫になる地位を狙い血みどろの争いなんて、王族にとって別段珍しい物でもない。」

それだけ地位を権威を求める人が多いという事でもあった。

「反対する貴族達などの説得は「大丈夫よ」へ？」

「他の貴族達なんて目じゃない位の子だから安心して良いわよ」

「目じゃないって、そんな方……」

「居るのかしら、いえお母様の事ですからこんな事ハツタリで言うはずないでしょうしでも……。」

「まあ実際に会ってみないとマリアちゃんも納得しないでしょうしね？」

「あっ不味い、この笑みは……。」

「おっお母様そ」もうすぐそちに着くはずだから「着く？」

誰がとは、もう聞けないこの人は、もう手札を切っている今更言っても無駄だろう。

渋々ながらも了解の意を伝えた、そして一応会ってからという話にしてくれるよう伝える。

「大丈夫よ、マリアちゃんもきつと気に入るはずよ」

「なんとって彼は、”最高の機師”だから……」。

s i d e o u t

第十八話（後書き）

感想 or 指摘は随時募集中です。

気軽に疑問に思った事とか書いてくれると感謝感謝です。

ここ、こうしたらどう？ とかの意見も募集していますのでどうぞよろしく。

あっシンプルに面白いとかだけの意見でも作者的には、うれしいので気軽にどうぞ w

P S ・最近忙しさが異常なので又又遅くなるかもしれない、読者の皆さんゴメンナサイ。

出来る限りの早め更新目指しますでござ容赦下さい。

ちなみに次は剣士の話の予定です。

では長々と失礼また次回にお会いしましょう。

第十九話（前書き）

見直ししましたが誤字脱字などありましたらメッセージください。

恐らくおかしい所は、無いはずですけど疑問に思った事があればメッセージください。

速攻修正しますんでよろしく願います。

第十九話

どこで間違えたんだろう。

俺何もしてないよね？ ホントなんでだ。

「嵌められた」

剣士の目の前に堂々と鎮座する球体、聖機人のコクーンだ。

ココは、ハヴオニワ国の軍事施設にある聖機人の格納庫。

白衣を纏った人やら作業着姿の人達が見守る中、剣士は一つの選択を迫られていたが。

「やるしかないじゃないかこんなの……」

こんな状況になったのには、語るも涙聞くも涙な出来事があった。

そうあの日、アルミスとハヴオニワの女王であるフローラ様に謁見した時の事だった。

「ハヴオニワ国」

「なら少しやって欲しい事があるんだけど……」

そんな事、女王から言われて嫌ですとはさすがに言えなかった。

こっちは、身分も住所も不定の不審者断れる理由が見つからない。それにアルミスは、ココで働ける様にフローラ様に取り計らってくれた。

元々アルミスは、聖機師候補として学院に通う予定だったそうで、卒業後もココで働ける様にしてくれたらしい。

嬉しそうに涙を流すアルミスを見て、ココで断ればアルミスにまで迷惑が掛かるのではないか。

そう考えると断る事が出来る訳無かった。

「分かりました」

後でこの決断を後悔するハメになると気付く筈もない俺だった。

side フローラ

「なら少しやって欲しい事があるんだけど……」

これでも女王、人を見る目は確かなつもりだ。

女王そして女としての勘が告げる、今この子を逃せば後悔する事になると。

元々アルミスを救う為の救出作戦だったが、思わぬモノが舞い込んできた。

アルミスは、学院の入学前に行われている聖機師の適正審査で平均値を大きく上回る耐久値を叩き出した期待の新人。

これからのハヴォニワ国の防衛を任せるには、十分過ぎる才能があった。

もちろん男性聖機師も貴重ではあるが、優秀な女性聖機師というのもまた貴重な存在だった。

そんな中だこの少年柁木剣士が来たのは、軍部の報告を聞けばたった一人で我が軍を相手取り桁違いの戦闘技能を見せつけた。

正直言つと何処かしらに誇張でも含んでいるのでは？ と疑問に

思ったが現場に居た数多くの兵からの証言も取れていたので疑いは既に無い。

そう単騎で一軍を相手取れる程の技術技能をこの少年は、持っている。

ならばやつてもらふ事は、唯一つ。

「分かりました」

「なら行きましょうか」

さあアナタは、なにを見せてくれるのかしら期待ばかりが膨らみ笑みが抑え切れなかった。

s i d e o u t

「なら行きましょうか」

フローラ様に付いて来ると言われ後を付いて歩き出す。

「剣士！」

「アルミス！？」

突然アルミスに後ろから抱きつかれ反射的に抱きとめた剣士にアルミスが頬を染めて言う。

「ありがと剣士、まだちゃんとお礼言つてなかったから」

剣士の腕の中で小さく呟くアルミスに剣士の胸の鼓動が高鳴る。

「またね剣士」

「うん、アルミスも元気でね」

潤んだ瞳のアルミスは、とても魅力的に見え剣士は、ドキドキと胸が鳴った。

そんな二人の様子を後ろから見ていたフローラ。
(これは、ふふ決まりね後は、剣士ちゃんの手力次第ね)
フローラの思惑に新たな参入を見つけ、剣士を連れ目的地に向かい歩を進めた。

side アルミス

部屋を出て行く剣士を見送ると胸がきゅつとなった。
恥ずかしい。まさか抱きしめられるなんてでも。

「ううゝどうしようドキドキする」

今更ながら自分の行動に恥ずかしさが胸中に渦巻き体が火照ってくる。

でも不思議と嫌な感じはなく、心地の良い胸の高鳴りにもう少し身を任せてみたいと思うアルミスだった。

side out

「ハヴォニワ国軍事施設」

「じゃあ剣士ちゃん、お願いね」

何をお願いなんですかフローラ様。

ここまで大掛かりにしておいて断れる筈もない。

「あのこれって何なんですか？ 見たこと無いんですけど」

疑問に思い聞いてみると、この球体はコクーンと言い聖機人の素体が収められているらしい。

今は、聖機師の適性検査用にカスタマイズされているらしく。話の流れからすれば、俺がこれに乗って聖機師としての能力がどの程度あるのか調べるのか？

ただ、それだけの筈なのに。

「こう碌な事にしかない気が……」

周りは至って真剣な研究者達と猛禽類を思わせるような笑みを浮かべたフローラ様。

逃げ場も退路も絶たれた孤立無援。

「嵌められた」

渋々剣士は、広間の中央に鎮座するコクーンに向かい歩き始めた。予想通り碌でも無い事になるとも知らずに……。

剣士がコクーンの前に着くと研究者達が居るモニター室から音声が来る。

「剣士ちゃん、そのコクーンに手を翳^{かざ}してみてそうすれば起動できるから」

フローラ様から指示に頷き、コクーンに恐る恐る手を翳すと、幾何学模様みたいなモノが現れ剣士をコクーン内部の素体まで運んでいった。

直後、眩いばかりの閃光。

肉眼でもハッキリと見える、高濃度の亜法が聖機人から吹き上がり真っ白の聖機人が堂々と姿を現した。

「うわぁ」

剣士の驚愕した声上がる。起動は成功、しかも尻尾があった。事前に聞いた亜法酔いもそんな予兆すら無いまま、先程聞かされた操縦法通りに動かしていく。

「凄いなコレ、ホントに人そのモノじゃないか」

聖機人の持つポテンシャルに嬉々として操縦桿を動かしていく。操縦者と動きがシンクロする、聖機師が何年も掛け習得する操作を意図も容易くモノにしていた。

途中から周りの事など忘れ夢中で聖機人を動かす剣士。

徐々に最初の頃のモツサリとした動きから想像できない機敏な反応、それに答えようと聖機人も己の限界までその能力を上げる。

「ココがこうなってるなら……、こっちか？ いやココだ！」

機械いや人、違うコレは聖機人、人であり機械でもある。

機械に出来なくとも、人にはできる事。人に出来なくても機械に出来る事。

その両方が可能になるそれが聖機人だ。

「なら、フローラ様！ あそこに置いてある剣使っても良いですか！」

「えっ？ ええ構わないわよ、けどそれでどうする……」

フローラ様の声は、もう聞こえない。

積み重ねた模擬剣の一本を掴み、広間の中央へ辺りは静けさに包まれた。

「ふう〜」

一拍の呼吸、ゆっくりとした動作で右手に持った剣を構える。

樹雷正統派剣術の独特な構え、長年に渡り受け継がれた剣術。

「ハッ！ セイ！」

振るう刃、剣先が霞む程の剣速が烈風を巻き起こす。

樹雷皇族柁木・遥照・樹雷が天賦^{てんぷ}の才と認めた剣の使い手。

その演舞は、見る人の心を掴み片時も目を背ける事ができず、剣士の演舞が終わるまで誰も口を開こうとしなかった。

side フローラ

私は、今起こっている事に驚きを隠せないでいた。

「白い聖機人……」

隣に居た研究者の言葉に止まっていた思考が戻る。

広間には、白い聖機人しかも尻尾まで付いた聖機人が堂々と存在していた。

白、こんな色の聖機人を私は今まで見た事も聞いた事も無かった。聖機人には、一つとして同じモノは存在しない。これが世間の一般的な常識。

多少色の似たモノはあるがどこかに違いが出るが、なぜか白と黒この二色の聖機人の存在は確認された事が無かった。だが目の前に存在する白い聖機人。

「本当に規格外ね、異世界人というのは……」

異世界人、これは古くからこのジェミナーでは、常識と化している存在。

異世界から来た者は、例外なく聖機師としての能力が桁外れという事だ。

一昔前の大戦時、異世界人が現れ助勢した勢力の戦力値を大幅に塗り替え常人には、不可能とも思える大功を打ち立てた。

そんな史実が今も尚、ここハヴオニワにも残されている。

その所為か現在でも各国には、異世界人の残した様々な技術や特産品などが数多く見られる。

それは異世界人が戦時において比類無き戦果を上げ、軍や各国の上層に名を連ねていた為でもあった。

「そんな異世界人の中でも白い聖機人なんて……」

そう今まで確認されている異世界人の聖機人で白いモノは、確認されていない。

異質、この子は一体何者なのかしら……。

思考の海に沈んでいたフローラの耳に剣士ちゃんの声が聞こえてくる。

「……………！ラ様！あそこに置いてある剣使っても良いですか！」

「えっ？ええ構わないわよ、けどそれでどうする……」

最後まで言い切る前に通信を切ってしまった剣士ちゃん。

一体何をするつもりなのか、いえ何を見せてくれるのか。

固唾を飲んで見守るフローラは、その光景を忘れる事など出来ないだろう。

聖機人が舞った。流派は分からないが精錬された動き、明らかに実戦で使われる筈の剣技を舞へと昇華させた剣舞。

離れたこの場からでも視認できない剣先が轟音と共に広間に突風を起こす。

目を奪われた、私自身も聖地で開催された武芸会で優勝した事もある、でも私にあんな剣舞ができるだろうか。
いや出来ない、あれは天に愛された天賦の剣だ。

私は剣士ちゃんの事は、何も知らないけれど、あの子の心は澄み渡っているそれだけは分かる。

『剣は、己の心を写す鏡』昔に言われた言葉。それが今聞こえてくるような…そんな気がした。

side out

「ふう」。あの検査って何時までやるんですか？」

剣士の若干場の空気を読み違えた様な声に一齐に我へと帰る。

「あつ検査は、終了してますんで別室で休んでください」

通信機から聞こえてきた研究員の声に返事をする急々と隣接した休憩所へと歩き始めた。

（ああこれでダメとか言われたらどうしよう、お城の雑用でもしよ
うかな…）

イマイチ、検査の合格ラインを履き違えたままの剣士は、不安有
々で休憩所に入ってしまった。

side フローラ&研究員's

「で、検査の結果は？　と言つまでも無いわね」

苦笑いなフローラ様に釣られ研究員達も苦笑いが止まらない。

耐久持続時間／測定不能

亜法耐性値／測定不能

検査時間TOTAL／二時間三十一分十六秒

「ホント規格外ね、アレだけの動きと二時間以上の搭乗に疲れ一つ見えないなんて……」

「我々も驚いていますよ、長年研究者として色々な聖機師を見てきましたがコレ程のモノ初めてですよ」

何十年と働いてきた研究所長の言葉にモニター室に居た皆が首を縦に振った。

「それとフローラ様、コレを見て頂けますか」

一人の研究員がモニターに映し出したのは、剣士ちゃんが乗っていた聖機人の人でいうバイタルデータの様な物だった。

聖機人の各パーツに掛かる負担をモニタリング出来、聖機師達が自身の癖や動きの修正等に使われているシステムだ。

これがどうかしたのかと疑問に思うフローラに研究員がよく見てくださいと一番大きいサイズのモニターにバイタルデータ映した。

「なっ！？ これってあの動きの！？」

「ええ、あの剣舞の時のバイタルをモニタリングしたモノです」

「あの動きで機体負担が10%未満……」

モニターを見た研究員達が絶句した、本来こんな数値は有り得ない。

どんなに優秀な聖機師でもさっきみたいな動きをすれば10%なんて数値軽く超えていく。

「こんな事可能なの？」

「理論上でなら……ですが」

100%完璧に人の動きをトレースできればの条件付きなら可能という事。

たったの1%でも操作を甘くすれば不可能との事だった。

「ハッキリ言つて異常ですよ。あの子は、人の出来る動きを聖機人の限界値で完璧に無駄無くやったのでしよう、初めて乗ったのにも関わらずです」

「ですが、ここまでが限界でしょうね」

「どうしてかしら？ この調子ならまだまだ腕が上がる筈でしょう？」

僅か二時間弱で、ここまでの成長を見せられてココが限界なんてありえない。

だが、次に言われた言葉にさらに驚愕させられる事になった。

「いえ、限界なのは、あの子でなくて聖機人の方ですよ。言った筈です、さっきの剣舞は聖機人の限界値だと」

言葉も無かった、そう先程の剣舞で剣士ちゃんが聖機人を限界まで行使した結果だと。

予想もして無かった事、まさか聖機師の能力に聖機人が耐えられないなんて想像していなかった。

だが、研究員の言葉は最もだとあの剣舞を見せられては納得せざる負えなかった。

「ならやる事は、決まったわね」

「ええ、ないのなら作れば良いのです。最強にして最高の機体を！
そうと決まれば、国家予算からでも幾らでも予算をつぎ込んで良
いと女王直々に許可を出した。

（これを機会に膿を出し切るのも考えておかないと……）

こうしてハヴォニワ国で国家機密となる新型聖機人の開発が始ま

った。

（さて、後は剣士ちゃんの立場の強化からね。まず身分を固めないと……ふふ楽しくなってきたわ…剣士ちゃん絶対逃がさないんだから）

猛禽類そのもの見つけた獲物を逃がさないよう。

獰猛な笑みを浮かべたフローラ様のマル秘計画が着々と幕を開けた。

s i d e o u t

第十九話（後書き）

今回もご愛読に感謝w

更新は、遅いですけど完結目指して書き上げますのでよろしく願います。

次回も剣士の話になる予定です。（途中で変更する可能性もあります）

では、また次回にお会いしましょうでわわw

第二十話（前書き）

ストックがなくなったw

恐らく修正点が多々出てくると思いますけどオオスジ的に変わらないのでどうぞご覧アレ

第二十話

「あのフローラ様……」

なぜか今剣士の姿は、施設から場所を変えフローラの執務室にあった。

剣士は先程の検査の結果を知らないまま連れて来られた。

やっぱり不合格なのか……。

不安な気持ちからか今すぐにでも土下座してしまいそうな勢いの剣士にフローラが言った。

「剣士ちゃん、うちで働かない？」

「はい？」

不合格じゃないんですか？ そう聞いた剣士に満面の笑みを浮かべたフローラは愛用の扇子を口元で広げ言った。

side フローラ

「文句無し、正直言って最高よ剣士ちゃん」

そう文句の付けようがなかった。剣士ちゃん以上の聖機師など探したっているはず無いと確信を持てた。

それは研究者達も同意見だった、いや「アレ程の聖機師が他にもいたら国が滅びますよ」そんな意見にも納得できるモノを見せられた。

ただでさえ貴重な男性聖機師、それも現在過去問わず最高の才を持つて何処の勢力にも所属せずに目の前にいる。

なら国の主、女王としてやる事は決まっている。

「あなたが欲しいのよ、どこの国にもアゲルつもりなんて無いのよ」

自分でも分かるくらい熱の籠った言葉。

目に見えて戸惑いを見せる剣士ちゃん、その小動物のような雰囲気
に少し胸が高鳴る。

でも、もう剣士ちゃんの相手は、決めてあるのよねえ……。

この子が居ればあの子マリアを汚い後継争いの中でも護ってくれる。

そう思えた。それに剣士ちゃんになら少しは、気軽になれる筈。

マリアは王族として王女としても百点満点な子だ、親の目で見て
も良くできた娘。

きつとあの人に似たのね、変に頑固で真面目、まあ堅物と言っ
ても良いくらい。

（けど、少し頑張り過ぎなのよねえ……）

そこが母としての心配事である、十二歳なりに学院で楽しんで欲
しい。

そう思うもののそう簡単にイカないのが王族である、マリアに近
づくのは各国でも上流の階級の貴族ばかり。

その殆どがマリア個人を見ていない、そうハヴオニワ国の王女マ
リア・ナナダンとして見ている。

彼女を色眼鏡無しで見てくれる者など居ない、護衛であるユキネ
彼女も護衛が仕事であるから色眼鏡無しとはいかない。

隣国のシトレイユのラシャラ・アース、彼女もマリアの従姉妹で
あるが、彼女はすでに戴冠式を終え王となった。

そうなれば政治的な問題もあり、マリアを特別扱いする訳にもい
かない。

こんな時何のシガラミもない唯一絶対的な味方が居ればどうだろ
う。

あんな感じに堅物なマリアも実のところ乙女チックな一面を持つ

一人の女の子だ。

間違いなく剣士ちゃんに好意を持つ筈だ。

「あの…フローラ様働くって何をすれば良いんですか？」

不安そうな剣士ちゃんに私は、一枚の紙を渡した。

「これって…任命状？——へっ？俺が伯爵！..」

〈任命状〉

柁木剣士。この者にハヴォニワ国女王直轄地の一部を領地とし、爵位”伯爵”を与えるものとする。

ハヴォニワ国女王フローラ・ナナダン。

「あの説明してくれませんか、どうして俺がいきなり貴族に？」

「それはね……」

今回の剣士ちゃん専用聖機人製作資金確保に主だって、今まで押えた証拠から不正などで没落追放させた貴族達の領地。

それらの一部を国地、私女王フローラ・ナナダンの直轄地とした事。

そして、ハヴォニワ国の聖機師として学院に行きこの国の王女マリア・ナナダンのそばに居る為に必要な事。

領地が有ると言っても管理をするのは、学院を無事卒業してからになり、王城から優秀な人材を派遣する事。

など色々と説明するフローラに剣士は、一言だけ言った。

「もう断れないじゃないですかここまでされたら……」

当たり前です。何のために僅かな時間でここまでの事をやったのか。

ちなみにフローラの私的な秘書（暗部的な者達）は皆今回の大仕事の疲労からか未だに床に臥せってる。

「じゃあ早速だけど明日学院の方へ向かって頂戴。——それと付き添いの子と仲良くね」

とっても良い笑顔なフローラを見て剣士の不安は、厄介な形で現実になるうとしていた。

s i d e o u t

あれだ、ホントに瀬戸様ソックリだ。こう強引で気が付けば虎穴って酷過ぎる。

（しかも貴族って俺の柄じゃないよなあ…）

爵位的には、割と高い方な伯爵。

この国の爵位階級は大まかに言う上から公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の五階級である。

間違っても俺みたいに不審者が何の功績もなくなれるモノではない。

「あの説明してくれませんか、どうして俺がいきなり貴族に？」

説明は至って単純だった。国家で俺専用の聖機人まで作るからその資金確保に汚職貴族没落。

でもって、フローラ様の娘マリア・ナナダン王女のそばにいるには、それなりの地位が必要だった事。

まるでこうなることを予測してたんじゃないのかそう思えてならない程の手際の良さ。

こうなってくると剣士に残された言葉は一つだけ。

「もう断れないじゃないですかここまでされたら……」

もう諦めた、これからどうなるんだろうか俺…。

剣士の不安を他所にフローラ様は、こんな事を言ってきた。

「じゃあ早速だけど明日学院の方へ向かって頂戴。——それと付き添いの子と仲良くね」

学院へ行くのは理解できる。

……けど付き添いの子って誰だ？

side アルミス

私の人生は、一度終わりを迎えた。

両親が家族が殺され、親類縁者も居ない天涯孤独となった。

もうダメだと思った、両親を殺した山賊に連れ去られきつとヒドイ目に遭わされる。

なんで私がこんな目に遭わなきゃいけない……そう何処に居るのが知らない女神を恨んだ。

けど、私は助かった。いえ助けられた光の中から現れた……に。

「はぁー剣士……」

アルミス・ピースハイトは、その件から悩んでんでいる事があった。

フローラ様からだと言官の人から貰った一枚の紙。

そこに書かれていたのは、これからの私の人生を決める重大な選択肢。

他の聖機師候補と同じように学院を卒業後、どこかの貴族又は軍部に所属する選択。

そして彼女を迷わせている、もう一つの選択肢。

それが柁木剣士伯爵の専属護衛機師になる選択だった。

いきなり貴族に成っていた事に驚きもしたが剣士ならありえるかなんてつい思ってしまう。

けど、正直な所私の気持ちは、決まっていた。

「私は、剣士様の側に居たいです」

それがフローラ様への返答だった。伯爵の護衛ならもつと優秀な人が相応しいのかもしれない。

けど、それなら私がもつと強くなれば剣士様を護れる位になれば良い。

私は、私の思いをありのままフローラ様に伝えた。

そんな私にフローラ様は、優しく微笑みかけ「頑張りなさいアルミス」そう言ってくれた。

side out

学院へ行くのは、明日の朝フローラ様の専用船を借り受けて出発するそうなので部屋で休んでるように言われ案内された部屋へ。

扉を開けると中は、恐らく来賓用の部屋なのだろう高そうな調度品が所狭しと並んでいて少し落ち着かない。

どちらかと言えば狭い部屋の方が落ち着く質な剣士にとって少し肩苦しかった。

（けど、折角用意してくれたんだし贅沢？ 言うのもアレか……）

只でさえ忙しいらしいのに自分の我儘を言うのも憚られると思い、とりあえずベットで横になろう。

ボフンとベットへ飛び込んだまでは、良かった筈だ。

サイズも部屋に合った推定キングサイズ、逸れて床に落ちる訳も無く見事にベットのと真ん中へ。

「きやう」

きやう？ ベットが喋る筈ないよな、そう思いサワサワと音のした方へ……むにゅ？ 柔らかい？

「あん」

……………っ！！？

バサッ！

「アッアルミス！？」

勢い良くシーツを捲り上げた剣士の目の前には、先程別れた筈のアルミスがメイド服を着た姿で横になっていた。

それも少し服がはだけてなんともいえない扇情的な姿で……。

「剣士様……」

「え？ あのここって俺の部屋だよな？ ——って様？」

なんで様付け？ 「…………——それと付き添いの子と仲良くね」なぜか先程のフローラ様の言葉が脳裏に過ぎった。

まさかフローラ様の言ってた付き添いの子ってもしかしくてもアルミスの事なのか？

「アルミス、えーとそのこれからよろしくで良いのか？」

「あっはい、今日から柁木剣士伯爵様の専属護衛機師となりました

アルミス・ピースハイトです」

「専属護衛機師？」

専属護衛機師というのは、貴族や王族の護衛を担当する聖機師の事。

基本的に爵位持ちの貴族は、何人かの聖機師を専属として雇う事が慣例となっていた。

中には雇わない人もいるが極小数に限られる。

またフローラ様が…と頭を抱える剣士にアルミスは自分が志願した事でフローラ様の所為ではないらしい。

それを男にとってはこう心にグツとくるような顔して言われるとなんとも言えずなし崩しの言ってしまう。

「おねがいします……」

もうダメだなるようにしかない。

諦めに近いモノをヒシヒシと感じさせるフローラのイタズラ。

剣士の知らない所で何が起きているのか、これからのこの世界での生き方に不安が怖い位に増していった。

side マリア

本国のお母様から連絡が入ってから一刻程経った頃。

マリアとユキネの二人は学院の皇族専用に造られた港へと足を運んでいた。

「ここで良いのかしら？ ユキネ」

「はい、多分もうすぐ…… あっあれ」

ユキネの指差す遥か彼方に見えるお母様の船『ビクトリア号』名

前からしてゴテゴテした装飾に船体色がピンクという何とも目に悪いシロモノ。

所有者の美意識を疑いたくもなるが本人は至って真面目に作っちゃったらしく。

工房の技師達もなんであんなモノ作ったんだ……と作った本人達が後悔する位、派手・デカイ・恥ずかしいの三重苦な船。

唯一助かったのが……。

「学院が始まっていて良かったですわ……こんなモノあまり見られたくありませんもの」

「……コクコク」

只でさえ色々と学院でも噂の絶えないお母様の悪名がさらに増える事になる。

なんとしてもそれだけは避けたいのだが『娘の心、親知らず』私気付いた時にはすでに遅い。

あまり無茶しないで下さいとしか言えないストレス、お母様にも少しは考えて行動して欲しい常識的に考えて……。

（常識……お母様には程遠いモノですわね）

娘にヒドイ言われようだがそれだけの事を平然とそれも予告無しにやってのけ周囲に多大な迷惑もとい苦勞を掛ける。

それがハヴォニワ国女王フローラ・ナナダンだった。

「ユキネ、こういう事は最初が肝心ですから」

「はい」

なぜか緊張でガチガチに固まっているユキネ。

亜法動力特有の静かな駆動音響かせエリザベス号が港に入港を始めた。

期待と不安が半々位、恐らく悪い人では無いというのは確かだと

思う。

あんな感じの母だが人を見る目は確かだと知っているから。

停泊した船から二人の男女が降りてきた。

（若い……）

想像していた感じの人とは違い青年というより少年と言った方が
良いかもしれない。

今までに縁談の話が有った相手は殆ど一回り年上なんて人が多
かった。

今回もそうなのかと考えていたがどうやら違らしい。

どう見ても私に近い年齢…。

「初めましてマリア様。 榎木剣士です」

優しい風貌、そのままの声色。

今までの相手と違う。 そう会って間もないけれどそう感じた。

これが私と彼榎木剣士との初めての出会い。

s i d e o u t

第二十話（後書き）

なんか途中で終わってる感が書いててあったんですけどまあいいやと投稿w

とりあえずこの話の流れのまま次回に持ち越しです。

でわでわまた次回に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786j/>

異世界の聖機師物語 another/story

2010年10月13日00時05分発行